平成９年度

市原市内遺跡発掘調査報告

郡本遺跡（第３次）
草刈谷畑遺跡
郡本遺跡（第４次）
中高根南名山遺跡
市原条里制遺跡（八幡砂田地区）

１９９８・３

市原市教育委員会

序　　文

房総半島のほぼ中央に位置する市原市は、豊かな自然環境と温暖な気候に恵まれ、いにしえより多くの人々が生活を営んできた証としての遺跡が数多く存在しています。

このことは、県下有数の貝塚である山倉天王貝塚や「王賜」銘鉄剣が発見された稲荷台1号墳、さらには国指定史跡上総国分僧寺跡・国分尼寺跡などに代表されるところでもあります。

一方、本市は首都圏に位置することから地域開発が急速に進展してきており、これら地域開発と埋蔵文化財の保護との調和をはかりながら、貴重な文化遺産を末永く後世に伝えていくことは、我々に課せられた大きな課題でもあります。

本書は、開発によって失われる市内所在遺跡について、国庫および県費の補助を受けて発掘調査を実施した発掘調査報告書でありますが、市原市の歴史を理解するための一助になればと願っております。

最後に、今回の調査を実施するにあたり、ご指導・ご協力を賜りました、文化庁、千葉県教育委員会、財団法人市原市文化財センターならびに関係諸機関に対しまして、心より感謝の意を表する次第であります。

平成10年3月

市原市教育委員会

教育長　大　野　　皎

例　　言

1　本書は、国庫及び県費の補助を受けて市原市教育委員会が主体となり実施した市内に所在する遺跡における発掘調査の報告書である。

2　発掘調査および整理作業は文化庁の国庫補助事業として助成金を受けた市原市教育委員会の依頼により財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書刊行については市原市教育委員会で行った。

3　今年度実施した発掘調査は下記のとおりである。

(1)　郡本遺跡（第３次）（センター調査コード　セ244）市原市郡本１丁目131

調　　査　専用住宅の建築に伴う調査で、調査対象面積604.53㎡のうち60㎡を確認調査、245㎡を本調査した。

調査期間　平成９年４月14日～平成９年４月23日

(2)　草刈谷畑遺跡（センター調査コード　セ245）市原市草刈1273番地他

調　　査　駐車場造成に伴う確認調査で、調査対象面積2,780㎡のうち278㎡を発掘調査した。

調査期間　平成９年４月24日～平成９年５月９日

(3)　郡本遺跡（第４次）（センター調査コード　セ246）市原市郡本３丁目201-1の一部

調　　査　共同住宅建設に伴う確認調査で、調査対象面積746.01㎡のうち74㎡を発掘調査した。

調査期間　平成９年５月12日～平成９年５月19日

(4)　中高根南名山遺跡（センター調査コード　セ257）市原市中高根字南名山1341-1,1341-2

調　　査　老人保健施設の建設に伴う調査で、調査対象面積13,000㎡のうち1,300㎡を上層、130㎡を下層において、確認調査した。

調査期間　平成９年９月16日～平成９年10月20日

(5)　畑木小谷遺跡（センター調査コード　セ256）市原市畑木246-1の一部,246-2の一部

調　　査　寮護施設の建設に伴う調査で、1,160㎡を本調査した。

調査期間　平成９年10月21日～平成10年２月３日

なお、整理作業・報告書作成は次年度以降を予定。

(6)　市原条里制遺跡（八幡砂田地区）（センター調査コード　セ218）市原市八幡字砂田261-2,262-2

調　　査　ガソリンスタンド建設に伴う調査で、調査対象面積1,588㎡のうち429㎡を本調査した。

調査期間　平成８年１月11日～平成８年２月５日　なお整理作業は平成９年度に実施した。

4　本書の執筆は、郡本遺跡（第３次）・草刈谷畑遺跡・郡本遺跡（第４次）・中高根南名山遺跡を、小川浩一が担当し、市原条里制遺跡（八幡砂田地区）を田中清美が担当した。

なお、市原条里制遺跡（八幡砂田地区）の写真図版は牧野光隆が担当した。

5　本書に使用した地形図は、市原市発行の１：25,000地形図および１：2,500地形図である。

6　遺跡全体図および遺構平面図に使用した北は、主に磁北を使用している。但し、郡本遺跡（第３次）（第４次）及び市原条里制遺跡では、遺跡周辺の基準点より座標北を移設している。また、遺構断面図中のレベルは郡本遺跡（第３次）（第４次）及び市原条理制遺跡においては、遺跡周辺の基準点より水準を移設し、草刈谷畑遺跡については、遺跡周辺の基準杭より水準を移設した。

7　調査区の設定は任意の座標を使用した。但し、郡本遺跡（第３次）（第４次）及び市原条里制遺跡については、遺跡周辺の基準点における公共座標を使用した。

本　文　目　次

序　文
例　言
第１章　調査遺跡の位置と環境 …… 1
第２章　郡本遺跡（第３次） …… 3
第３章　草刈谷畑遺跡 …… 10
第４章　郡本遺跡（第４次） …… 14
第５章　中高根南名山遺跡 …… 16
第６章　市原条里制遺跡（八幡砂田地区） …… 18

挿　図　目　次

調査遺跡の位置と環境
第１図　調査対象遺跡周辺の主な遺跡分布図１ …… 2
第２図　調査対象遺跡周辺の主な遺跡分布図２ …… 2
郡本遺跡（第３次）
第３図　郡本遺跡（第３次）調査地点と周辺地形図 …… 3
第４図　本調査範囲及びグリッド配置図 … 4
第５図　本調査区域平面図・断面図 … 5，6
第６図　出土遺物実測図① …… 8
第７図　出土遺物実測図② …… 9
草刈谷畑遺跡
第８図　草刈谷畑遺跡調査地点と周辺地形図 …… 11
第９図　調査範囲と遺構配置図及び断面図 …… 11
第10図　出土遺物実測図① …… 12
第11図　出土遺物実測図② …… 13
郡本遺跡（第４次）
第12図　郡本遺跡（第４次）調査地点と周辺地形図 …… 14
第13図　調査範囲と遺構配置図 …… 15
第14図　出土遺物実測図 …… 15
中高根南名山遺跡
第15図　中高根南名山遺跡調査地点と周辺地形図 …… 16
第16図　調査範囲と遺構配置図 …… 17
市原条里制遺跡（八幡砂田地区）
第17図　市原条里制遺跡（八幡砂田地区）調査地点と周辺地形図 …… 19
第18図　調査範囲と遺構配置図 …… 19
第19図　１トレンチ，２トレンチ土層断面図 …… 20
第20図　出土遺物実測図 …… 20

図　版　目　次

図版１，４，５　郡本遺跡（第３次）
図版２，６，７　草刈谷畑遺跡
図版２，８　郡本遺跡（第４次）
図版３，８，９　中高根南名山遺跡
図版３，９　市原条里制遺跡（八幡砂田地区）

第１章　調査遺跡の位置と環境

今年度の対象遺跡は、市域の北部４カ所、南部１カ所の計５カ所である。遺跡の位置と周辺環境の概略を述べる。

郡本遺跡（第３次）（第４次）は、房総半島の東京湾旧海岸線より約３㎞東の内陸に入った通称「市原台地」といわれる標高約21～22ｍの台地上に位置する。立地する台地は、西に東京湾の沖積地である海岸平野を臨み、北西側から２つの小谷が入り込む舌状の地形を呈する。調査した地区は、地名（郡本）や郡本八幡神社に存在する巨大な礎石等の存在により、市原郡衙の有力推定地になっている。昭和62年に**郡本遺跡**、平成7 年に**郡本遺跡（第２次）**として周辺を調査しており、昭和62年の調査では、弥生時代後期及び奈良・平安時代竪穴住居跡、遺物では金銅製帯金具の巡方や墨書土器が出土し、第２次調査では、同じく弥生時代後期及び奈良・平安時代竪穴住居跡や掘立柱建物跡、土坑等を検出した。今回の第３次調査区域は、郡本八幡神社本殿の参道を130ｍ西に向かった位置にあり、また第４次調査区域は郡本八幡神社の北側に隣接し、第２次調査区の東側隣接地にあたる。周辺の遺跡としては、弥生時代中期の人面土器を検出した**三嶋台遺跡**が両遺跡から北西約300ｍに位置する。また、弥生時代後期の遺跡では、同期の竪穴住居跡を68軒検出した**唐崎台遺跡**が南東約500ｍにあり、南側約500ｍには**郡本大宮遺跡**が存在する。古墳時代後期～奈良・平安時代竪穴住居跡73軒、土師器窯等を検出した。さらに約１㎞南南東には、**千草山廃寺**や古墳時代後期～平安時代の集落跡である**千草山遺跡**が存在し、南へ約１㎞には60数棟の掘立柱建物跡を検出した**稲荷台遺跡**がある。また北東約600ｍに上総国府の推定地である**古甲遺跡**、北西約１㎞には**上総国分僧寺・尼寺跡**がある。

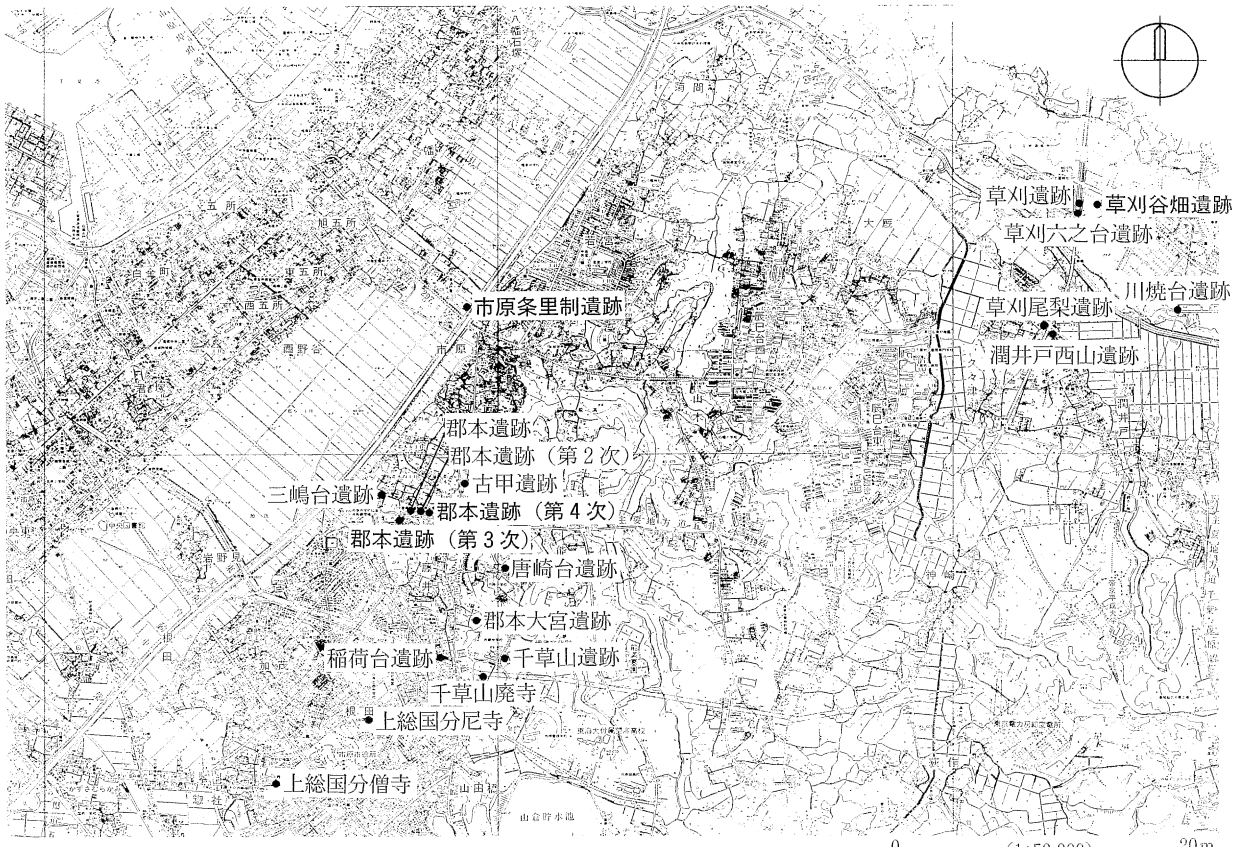
草刈谷畑遺跡は、村田川中流域を南に臨む標高約35～36ｍの台地上に位置し、周囲は㈶千葉県文化財センターにより**草刈遺跡**として現在も調査が一部進行中である。周辺には、南東約800ｍに小銅鐸を検出した**川焼台遺跡**や、南側隣接地において古墳時代前期の集落を検出した**草刈六之台遺跡**など、多数の集落跡や古墳群が存在する。他には、西側の都市計画道路部分において、昭和58年度に㈶市原市文化財センターにより調査が行われた**草刈遺跡**があり、弥生時代中～後期の竪穴住居跡や古墳時代前期の方形周溝墓を検出した。また、南南西約900ｍには、弥生時代中期の環濠および竪穴住居跡や古墳時代前期の竪穴住居跡が検出された**潤井戸西山遺跡**及び、弥生時代中期の竪穴住居跡や古墳時代前期の竪穴住居跡が検出された**草刈尾梨遺跡**が存在する。

中高根南名山遺跡は、標高約80ｍの台地上に位置し、隣接する西側において昭和62年度から平成４年度にかけ一部の調査が行われており、土坑、陥し穴、方形周溝状遺構、溝、道路状遺構及び旧石器時代剥片検出地点等を検出した。周辺の遺跡としては、北西約300ｍに縄文時代草創期の土器群や石器群が検出された**南原遺跡**や南側約１㎞に廃寺跡等を検出した**萩ノ原遺跡**がある。また、本遺跡周辺は古代～中世にかけて駅路や鎌倉街道の推定地となっており、北に**外迎山遺跡・山見塚遺跡・唐沢遺跡**といった**立野遺跡群**及び**字鎌倉街道**等が存在している。

市原条里制遺跡は、東京湾東岸に広がる沖積低地上にあり、標高は約５ｍである。東側に隣接する館山自動車道において調査が行われており、古代～近世にかけての畦畔が部分的に検出されている。

参考文献

市原市教育委員会『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図　北部編・南部編』1988



第１図　調査対象遺跡周辺の主な遺跡分布図１

第２図　調査対象遺跡周辺の主な遺跡分布図２

第２章　郡本遺跡（第３次）

調査方法（第３・４図）

公共座標に基づいて３×３ｍの大きさを基本とするグリッドを８カ所設け、これによって遺構の広がりを確認した後、建物部分の本調査を実施した。

遺構と遺物（第５～７図）

遺構としては、竪穴住居跡２軒、溝２条の他多数のピットが検出された。

１号住居跡

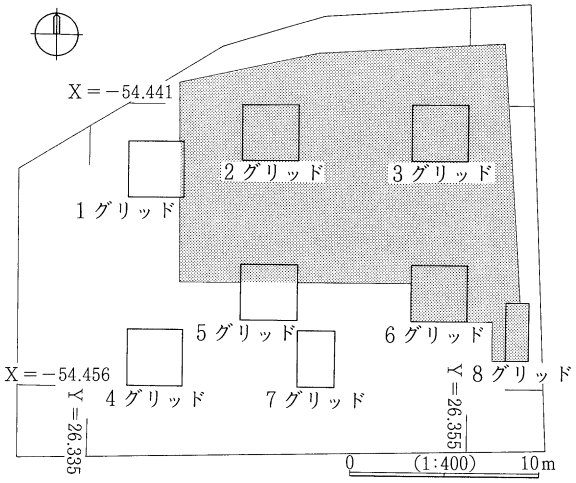
形態　方形プランで東西軸長3.8ｍ、南北軸長3.3ｍを測り、西側にやや延びる形状を呈す。

構造　床面は全体的に堅固であり、主柱穴を結んだ中央部の範囲が特に硬化していた。壁高は、各辺とも13～15㎝前後を測る。壁溝が全周している。主柱穴Ｐ１～Ｐ４はいずれも垂直な掘り込みであり、深さはＰ１が45㎝、Ｐ２が40㎝、Ｐ３が40㎝、Ｐ４が48㎝を測る。各柱穴とも明瞭な柱当たりが、観察された。Ｐ５は深さ６～８㎝を測る浅い掘り込みである。出入り口に伴う掘り込みとも考えられる。貯蔵穴等は検出されなかった。また、貼り床内ピット等は存在しなかった。

カマドは北辺部中央よりやや東寄りに位置する。山砂・白色粘土を主体に壁体を構築しており、天井部構築材が燃焼部内に崩落した状態で検出された。ソデ部は長さ45～50㎝を測る。煙道部は長さ90㎝を測り、奥にピットが存在する。ピット内から遺物等は検出されなかった。

出土遺物　カマド燃焼部からカマド前面の床面上にかけて甕13が出土し、カマド右ソデ前面から甕15が出土した。中央北寄り床面上からは、ロクロ土師器杯６を検出した。体部下半手持ちヘラケズリ、底部外周に回転ヘラケズリを行う。また、甕17を覆土上層から、甕19を覆土中～下層において検出し

第３図　郡本遺跡（第３次）調査地点と周辺地形図



第４図　本調査範囲及びグリッド配置図

た。管状土錘（31・32・37・38）はいずれも床面上から検出された。31は、現存長4.2㎝、最大径1.75㎝、中心穴径0.45㎝、重量11.0ｇ、32は、現存長4.25㎝、最大径1.45㎝、中心穴径0.4㎝、重量8.1g、37は、現存長5.2㎝、最大径1.65㎝、中心穴径0.4㎝、重量11.6ｇ、38は現存長5.0㎝、最大径1.6㎝、中心穴径0.4㎝、重量12.4ｇをそれぞれ測る。一方、Ｐ１付近東側においてはロクロ土師器杯７を覆土中より検出した。底部は全面手持ちヘラケズリを行う。また須恵器杯21は覆土上層より出土し、管状土錘35が床面上より検出された。35は現存長5.3㎝、最大径1.75㎝、中心穴径0.4㎝、重量12.4ｇで、両端部に指頭痕が残る。住居東辺中央おいても管状土錘33が床面上から、34が覆土下層からそれぞれ検出され、33は現存長5.25㎝、最大径1.85㎝、中心穴径0.45㎝、重量14.3ｇを測るが、下端部を欠失する。34は現存長5.5㎝、最大径1.8㎝、中心穴径0.4㎝、重量14.6ｇを測り、下端部を一部欠失する。住居北辺東側においては甕20を覆土上層より検出する。またＰ２付近東側では、須恵器高台付椀23を覆土下層より検出し、Ｐ２付近西側においては、須恵器蓋24が覆土上層から出土した。Ｐ３付近では南側に管状土錘29が覆土下層から検出された。現存長5.4㎝、最大径1.6㎝、中心穴径0.4㎝、重量12.9ｇを測る。北西側からは、ロクロ土師器杯11を床面上より検出した。口唇部外面に沈線状のくぼみがほぼ全周する。Ｐ４付近北側からは、甕12が床面上より検出された。Ｐ５付近では北側で縄文土器底部66が、覆土上層より出土したが、時期は不明である。西側では須恵器高台付杯底部25を覆土下層より検出する。底部は全面回転ヘラケズリ。高台部ヨコナデ。また住居中央南側では、管状土錘30が覆土中～下層より検出された。下半部を欠失し、現存長5.4㎝、最大径2.0㎝、中心穴径0.4㎝、重量19.8ｇを測る。住居西辺中央では、甕18を覆土下層より検出する。その他にカマド右ソデ脇からロクロ土師器杯２が出土している。ほぼ完形で出土し、底部回転糸切り無調整、体部下端手持ちヘラケズリを行っている。同じくカマド左ソデ脇壁溝内から、支脚27が溝底直上より検出された。住居北辺東側壁溝内からは、ロクロ土師器杯８が覆土上層より出土した。内面の底部と体部の立ち上がり部に圧痕がある。また、管状土錘39が覆土下層より検出された。現存長5.6㎝、最大径1.6㎝、中心穴径0.4㎝、重量11.5ｇを測り、上端部・下端部に指頭痕が残る。住居東辺北側壁溝内からは、管状土錘（36・40・41・42）が検出された。36は現存長4.8㎝、最大径1.6㎝、中心穴径0.4㎝、重量8.8g、40が現存長5.1㎝、最大径1.8㎝、中心穴径0.4㎝、重量12.6ｇ、41が現存長5.85㎝、最大径1.9㎝、中心穴径0.4㎝、重量15.9ｇ、42が現存長5.45㎝、最大径1.8㎝、中心穴径0.35㎝、重量13.6ｇをそれぞれ測る。出土位置は、36・40が底面上41・42が覆土下層である。住居南辺東側では、須恵器大甕頸部26が覆土上～中層において出土した。頸部外面には、幅約１㎝の板状工具による２条の波状文が施される。また胴部内面には同心円状のタタキ目が残る。住居南辺中央壁溝内からは、甕16が底面上から検出され、須恵器杯22が覆土上層より出土している。また住居南辺西側壁溝内からは、ロクロ土師器杯４が覆土下層より検出され、底部全面手持ちヘラケズリを行い、体部外面も手持ちヘラケズリを行う。そして、住居西辺南側壁溝内より管状土錘28が覆土下層から検出されている。

現存長4.8㎝、最大径1.6㎝、中心穴径0.4㎝、重量11.4ｇを測るが、下端部を欠失する。外面は、管状土錘28のみ縦位の強いナデを行っているが、他の土錘はすべてナデ調整である。住居内一括遺物としては、ロクロ土師器杯９、68、土師器底部10及び管状土錘43～54が出土し、土師器杯１、ロクロ土師器杯３・５、甕14が貼り床内から出土している。土錘の重量は43は10.4g、44は12.8g、45は6.3g、46は15.4ｇである。総括すると、杯は２を除き遺存状態の良好なものは少ない。須恵器も破片資料のみである。土製品は管状土錘が27個にわたって検出され、出土位置は多くが覆土下層～床面上ないし壁溝底直上であり、住居北東側に集中する傾向を持つ。出土位置等から考えて、本遺構に伴うものと考えられる。本遺構の帰属時期は、８世紀第４四半期頃に比定されると考えられる。

２号住居跡

形態　コーナー部に若干の丸味を帯びた方形プランで、主軸長4.8ｍを測る。

構造　床面は検出時点で既に失われてしまっており、掘り方のみが残存している状況であった。確認面から掘り方までの深さは約10㎝前後である。壁溝等の遺存は確認されなかった。Ｐ１～Ｐ３は主柱穴と考えられ、Ｐ２は垂直な掘り込みであるが、Ｐ１・Ｐ３は上面径が比較的大きく、二重に掘り込まれたような形状を呈している。各ピットにおける掘りかたからの深さは、Ｐ１が72㎝、Ｐ２が60㎝、Ｐ３が62㎝を測る。各柱穴ともに明瞭な柱当たりが観察された。Ｐ４は貯蔵穴の痕跡と考えられ、掘り方からの深さは14㎝を測る。

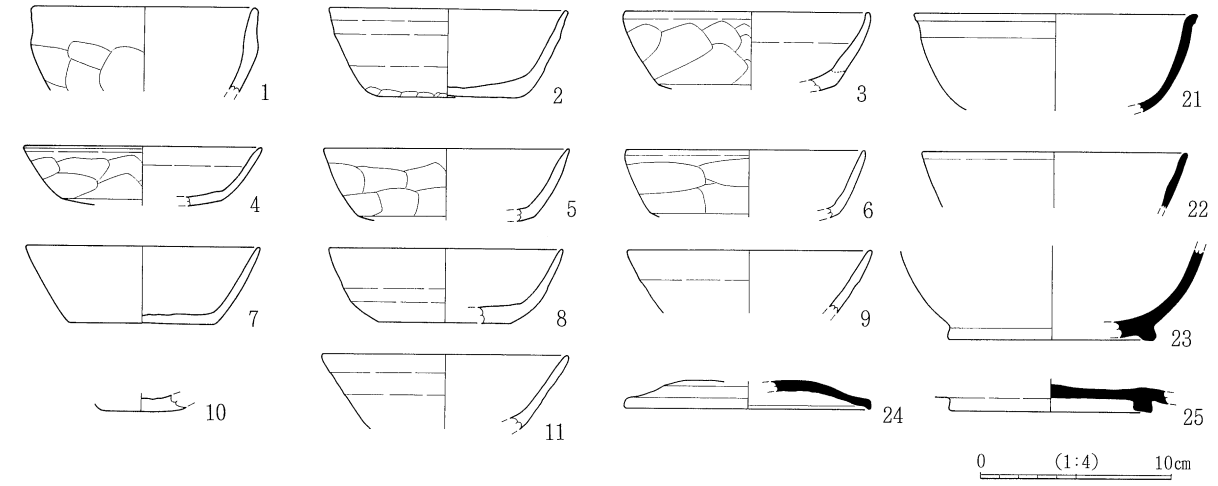
カマドは既に失われ、北西辺中央付近に構築材及び焼土のみが散在していた。煙道等は、検出されなかった。

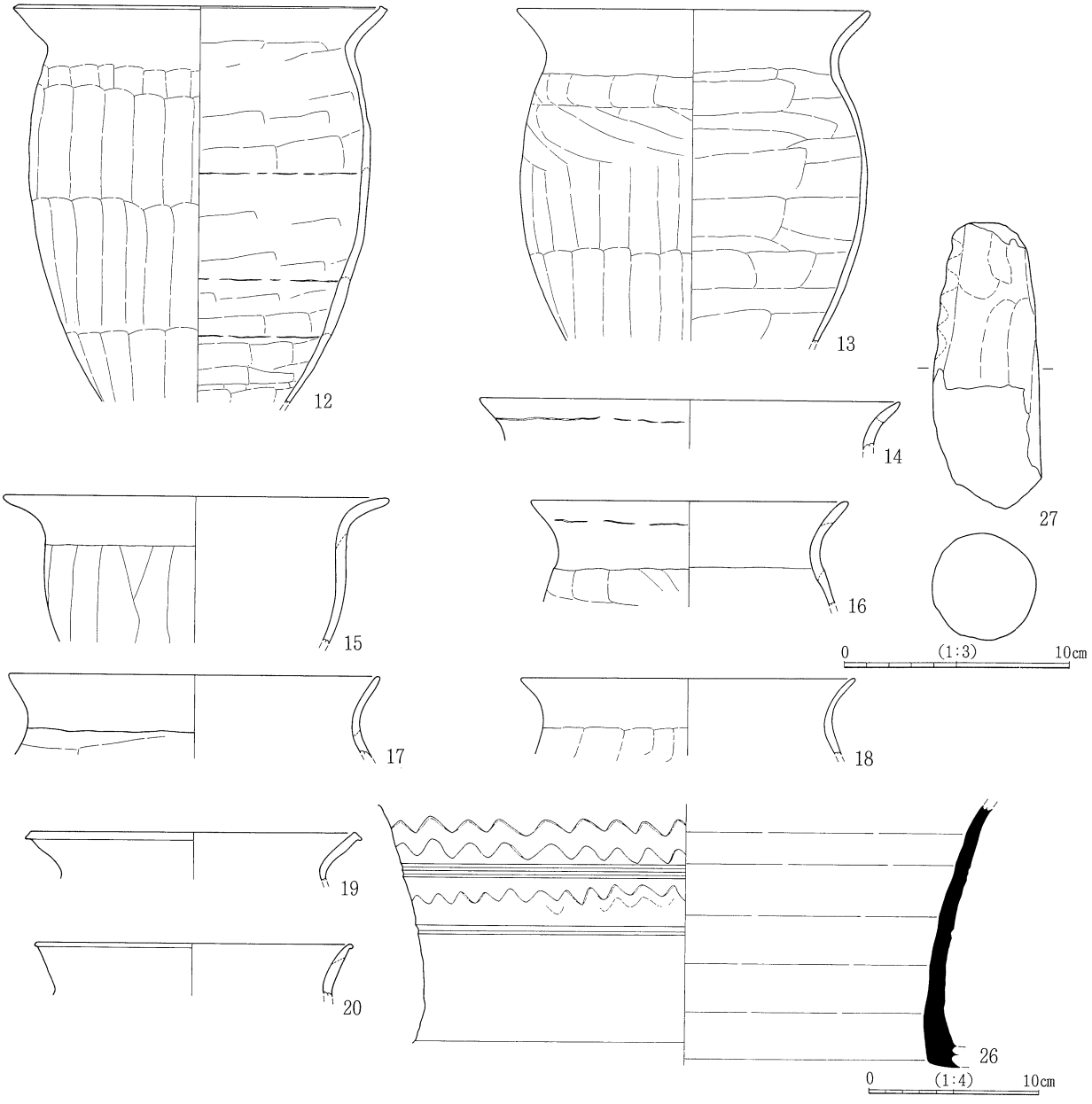
出土遺物　遺構自体が著しい攪乱を受け遺物はきわめて少なかったが、北西辺中央のカマド構築材散在部分に入り込むようにして土師器杯片55が検出された。本遺構の時期決定は難しいが、遺物の特徴及び住居の形態等から判断すると、５世紀末～６世紀初頭に比定される可能性がある。

１号溝状遺構　本調査区域北側を、座標上の東－西から北東－南西方向に約３°～９°振れる方向で若干蛇行しながら20ｍ程の長さが確認された。１号住居跡の南東隅壁を一部切断して掘削されており、同住居跡南辺付近で途切れていた。また本遺構内北東側において、ほぼ底面に若干“くの字”状に折れ曲がりながら蛇行するピット列が検出されている。ピットは計７個で、二重に掘り込まれたような形状を呈しているピットも存在する。しかし、溝底面からの掘り込みの深さは0.2～0.5ｍと一定せず、また垂直な掘り込みのピットもあるが、掘り込みの浅く不整形なものや底径の小さい逆円錐形の掘り込みもあり一定していない。本遺構に伴う可能性が高いが、具体的な性格は不明である。本遺構は１号住居跡南辺東側付近で、調査区西端から本遺構と平行して延びてくる２号溝状遺構を切って北東へ進んでいく。土層観察等から、本遺構の方が新しいと考えられる。遺物は覆土からロクロ土師器杯56～58が出土している。57・58は、底部片で、回転糸切り無調整である。同じく覆土から、土師器甕63・64が出土している。

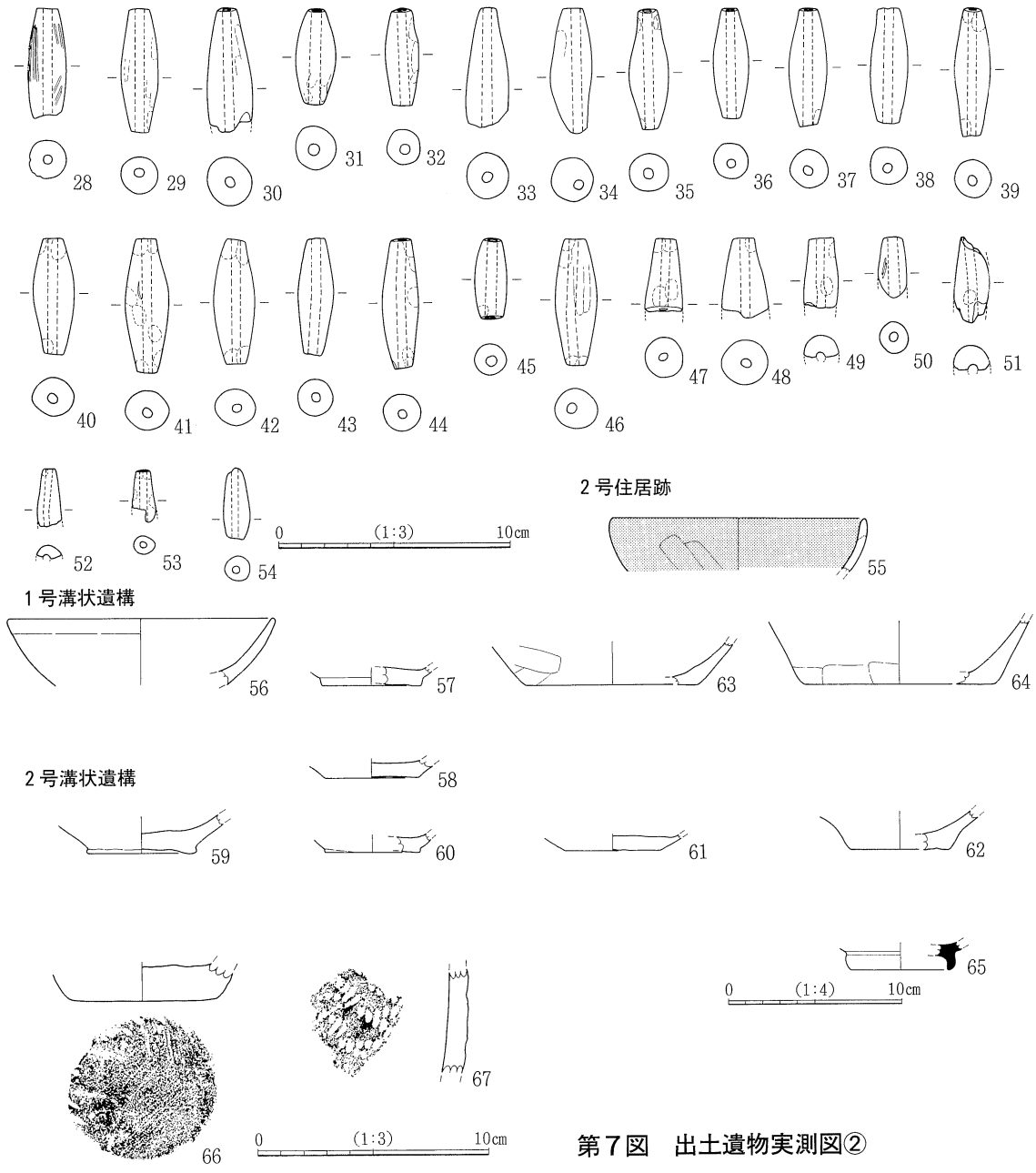
２号溝状遺構　本調査区域北側西端を、座標上の東－西から北東－南西方向に約０°～４°振れる方向で若干蛇行しながら北東へ進み、１号住居跡南東付近で同じく座標上の東－西から北東－南西方向に約36°振れる方向へクランクするように曲がる。１号溝状遺構によって切られ、８ｍ程の長さが確認された。調査区西端が最も深く、北東に進むにつれて浅くなる。遺物は、覆土からロクロ土師器杯59～62が出土する。いずれも底部片で、回転糸切り無調整である。

1号住居跡





第６図　出土遺物実測図①



第7図　出土遺物実測図②

その他の遺構　本調査区域東端中央に隅丸の長方形を呈する落ち込みが確認された。底面はおおむね平坦で、中央から西側にかけてきわめて堅固な硬化面が確認された。遺物の出土は皆無であり、現状では時期・性格ともに不明である。

その他の遺物　その他の一括遺物としては、灰釉陶器碗65が出土し、高台部が残存する。他に縄文土器片67が出土している。また中世陶器が4点（69～72）、近世陶磁器が7点（73～79）出土している。

小　結　今回の確認・一部本調査の結果、掘立柱建物跡等の遺構は検出されなかったものの、8世紀末に比定される竪穴住居跡や、平安時代中期頃まで遡る可能性のある溝状遺構等の存在が把握された。これは、市原郡衙推定地となっている本台地上における当該期の遺構の広がりや変遷をとらえるうえで貴重な資料を加えたことになると考えている。

第３章　草刈谷畑遺跡

調査方法（第８・９図）

11本のトレンチを任意に設定し、遺構の有無を確認した。不明確なものについては一部掘り下げ、その性格と帰属時期を把握するようにした。

遺構と遺物（第９～11図）

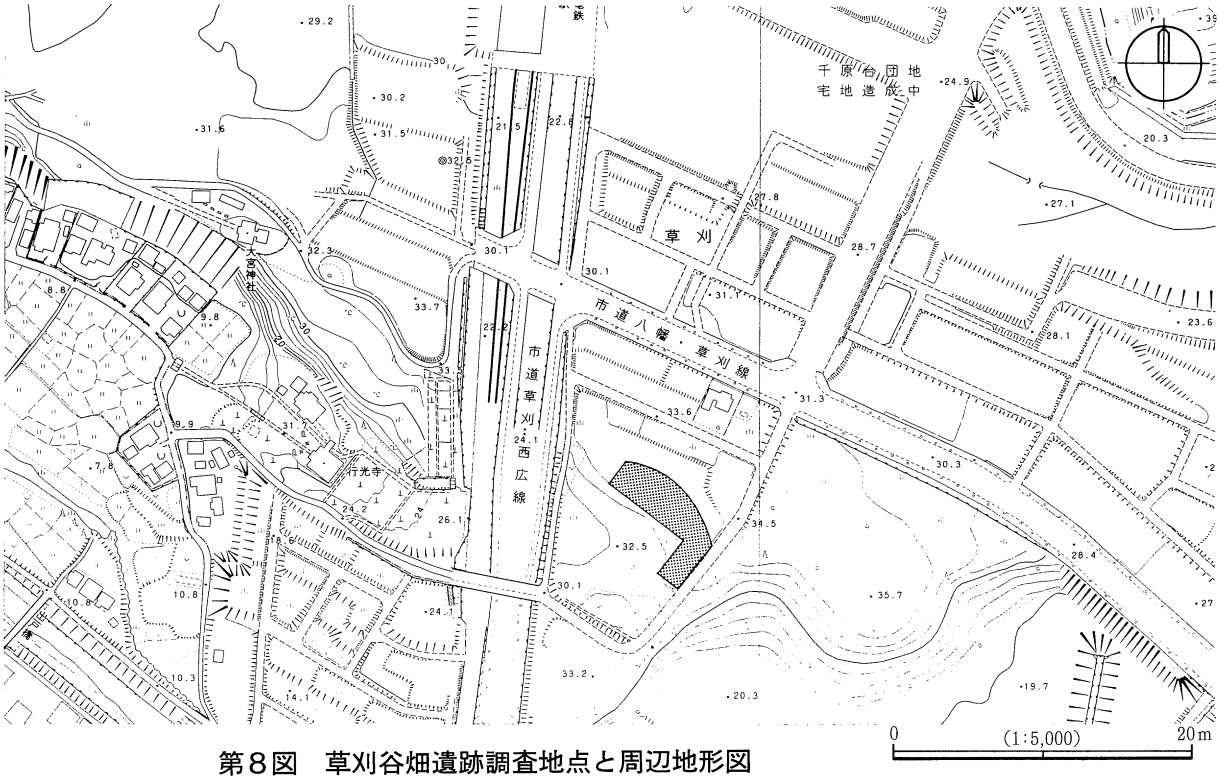
遺構は、調査区域のほぼ全面に分布している。表土は、南東部に行くほど堆積層が厚く40～50㎝前後になるが、北西側に行くにしたがい薄くなり北西端のトレンチ内では、平均20㎝程で確認面に達する。確認された遺構は、古墳時代中期円墳１基、弥生時代後期～古墳時代前期竪穴住居跡14軒、古墳時代前期土坑２基、時期不明溝１条である。

１号墳の墳丘は遺存していなかった。外周の平面はややいびつであるが、ほぼ正円形を呈すものと考えられる。確認面内径は推定17ｍ、同じく周溝を含む外径は、推定21ｍと考えられる。周溝は、確認面において１トレンチで幅1.48ｍ、深さ0.35ｍ、３トレンチで幅1.93ｍ、深さ0.51ｍ、９トレンチで幅2.03ｍ、深さ0.68ｍ、８トレンチで幅1.45ｍを測る。覆土は自然堆積の状況を呈する。遺物は杯28が周溝内より検出されている。遺物出土量が少なく時期決定は難しいが、古墳時代中期末前後と考えられる。

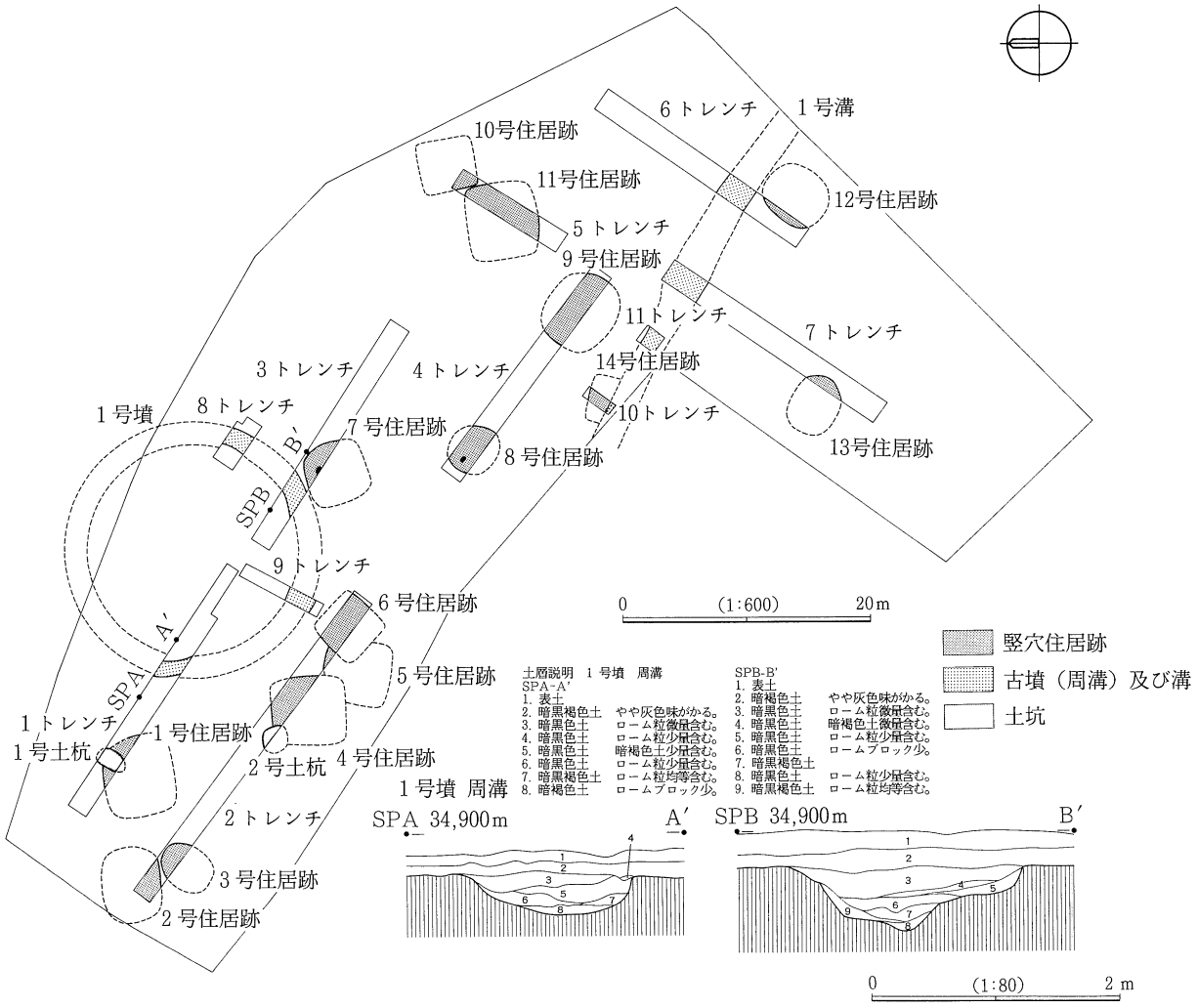
５号住居跡からは覆土内より土製の紡錘車26が出土し、６号住居跡の覆土内より鉢５・19，小型品底部20・22、壺25、チャートの石核36が出土した。遺物の状況等から、弥生時代後期末～古墳時代初頭頃に比定される。また７号住居跡から、甕８・11、磨製石斧40を検出した。本遺構は一部掘り下げて炉が確認されている。遺物の状況等から、弥生時代後期末～古墳時代初頭頃に比定される。８号住居跡からは、床面上より、浅鉢６がほぼ完形で検出された。弥生時代後期に比定される。10号住居跡からは、坩７が覆土内より出土した。11号住居跡からは、高杯の杯部13、甕17、坩18、小型品底部21・23及び敲石38がそれぞれ覆土内より検出され、確認面より勾玉31が出土している。また、縄文中期土器片41・51・54・56・57が覆土中より出土したが、いずれも混入と考えられる。遺物の状況等から、古墳時代前期に比定される。また12号住居跡からは、壺３が覆土内より出土している。遺物出土量が少なく時期決定は難しいが弥生時代後期と考えられる。13号住居跡からは、壺1 がほぼ床面上から検出された。遺物の状況等から弥生時代後期に比定される。１号土坑跡からは、覆土中より坩９・12・15、甕14、小型品底部24が出土し、２号土坑跡から覆土中より甕２，ミニチュア土器27、磨石39が出土した。また７トレンチ内１号溝覆土中より甕10が出土したが混入と考えられる。

その他の遺物　その他の遺物としては、８トレンチより壺４、２トレンチより高杯脚部16、杯30、１トレンチより杯29が出土した。また、９トレンチではチャートの石核37、２トレンチでは、軽石34、磨石35、１トレンチからは、黒曜石チップ32、８トレンチからは、同じく黒曜石チップ33が出土している。縄文土器では、42～48・50が２トレンチ内より一括で出土している。また４トレンチでは49、１トレンチでは55が出土している。いずれも縄文時代中期である。また１トレンチ内１号土坑においては、縄文中期土器53が出土したが混入と考えられ、２トレンチにおいては縄文中期土器52、縄文後期土器58が２号住居跡確認面上付近で出土したが、遺構自体の遺存状況が悪いこともあり、いずれも本遺構に帰属する可能性は少ない。

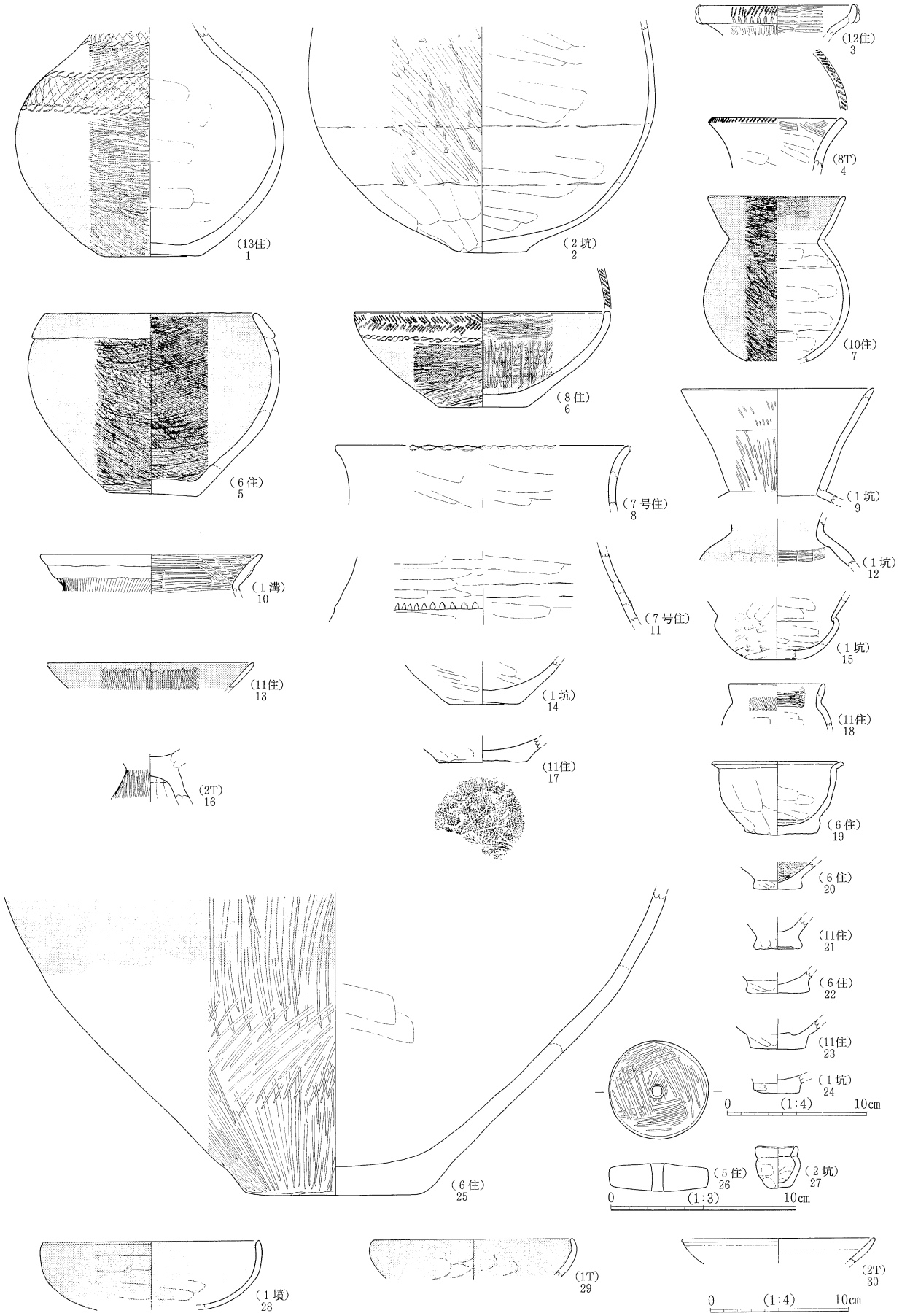
小　結　今回の調査の結果、隣接する草刈遺跡と関連する遺構の存在が明らかとなった。



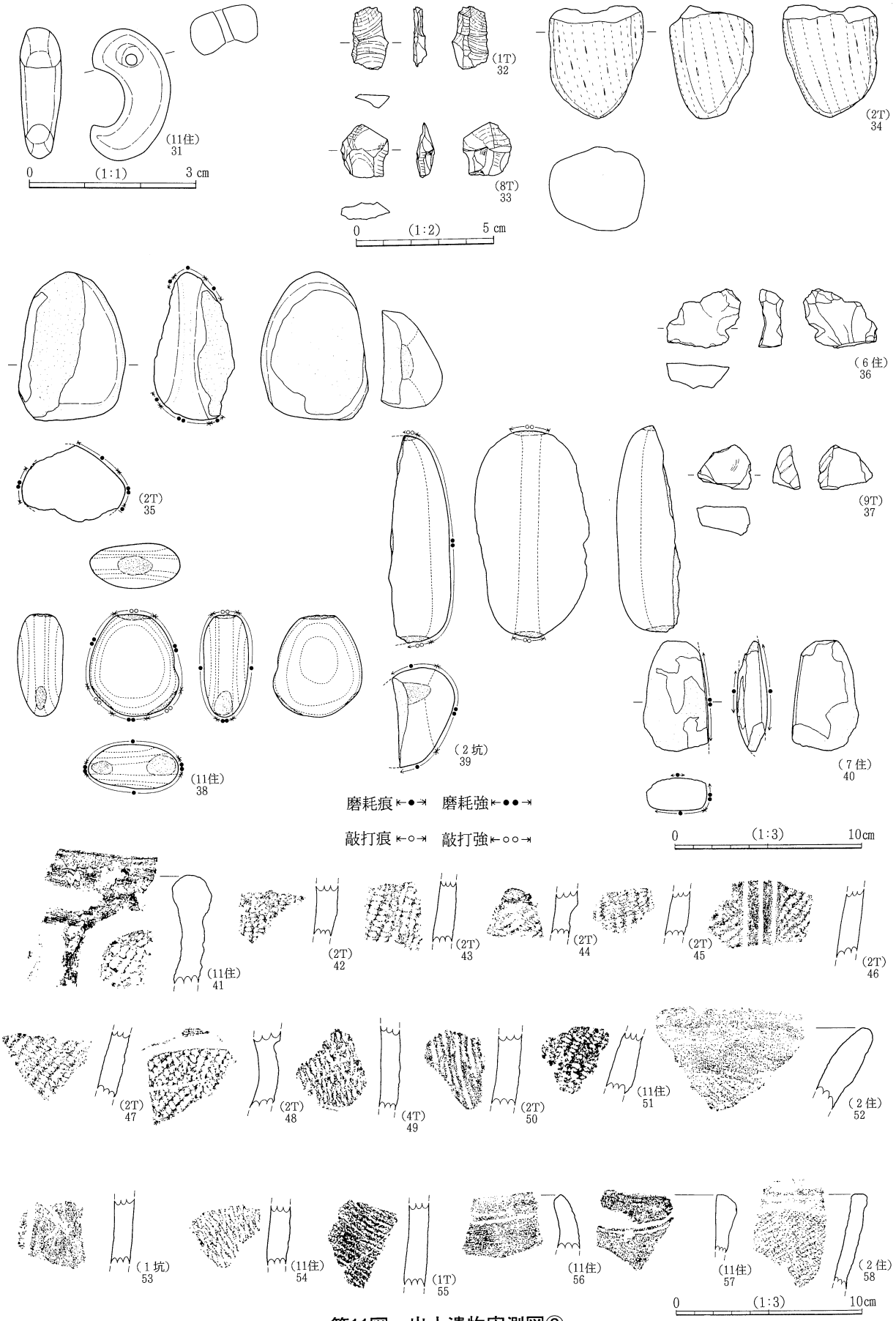
第８図　草刈谷畑遺跡調査地点と周辺地形図



第９図　調査範囲と遺構配置図及び断面図



第10図　出土遺物実測図①



第11図　出土遺物実測図②

第４章　郡本遺跡（第４次）

調査方法（第12・13図）

公共座標に基づき３×３ｍを主体としたグリッドを９カ所設け、遺構の有無と性格を把握した。

遺構と遺物（第13・14図）

弥生時代後期及び奈良・平安時代の竪穴住居跡８軒及び奈良・平安時代掘立柱建物跡３棟が検出された。確認面は、耕作による攪乱が著しい。

Ａグリッド　西側において１号住居跡が検出されている。表土から確認面までの深さは、約20㎝であり、確認面から床までの掘り込みは約20㎝である。遺物は破片資料のみでとくに図示できるものはなかったが、遺構の状況等から判断して弥生時代後期に比定されると考えられる。また、本グリッドの南側において、１号掘立柱建物跡が検出されている。

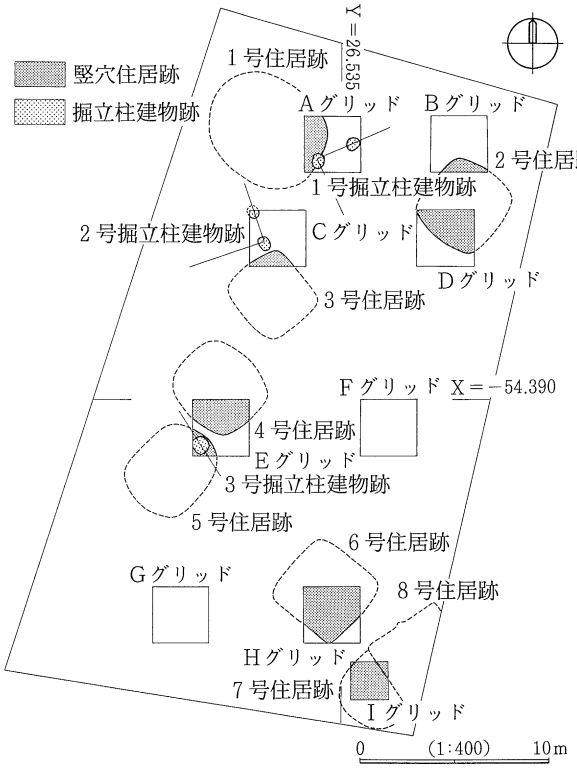
Ｂグリッド・Ｄグリッド　Ｂグリッドの南側及びＤグリッドの北側において、２号住居跡が検出されている。確認面から床面までの掘り込みは23㎝である。遺物は覆土内から壺口縁部16が出土している。遺構・遺物の状況等から判断して、弥生時代後期に比定されると考えられる。

Ｃグリッド　南側において、３号住居跡が検出された。遺物は破片資料のみでとくに図示できるものはなかった。また本グリッドの西側では２号掘立柱建物跡が検出されている。

Ｅグリッド　北側において４号住居跡が検出されている。表土から確認面までの深さは約20㎝である。遺物は破片資料のみである。また本グリッドの南西隅において、５号住居跡及び３号掘立柱建物跡が検出されている。遺物は４号住居跡と同様に、破片資料のみである。

Ｈグリッド　北側において６号住居跡が検出されている。表土から確認面までの深さは約30㎝であり、

第12図　郡本遺跡（第４次）調査地点と周辺地形図



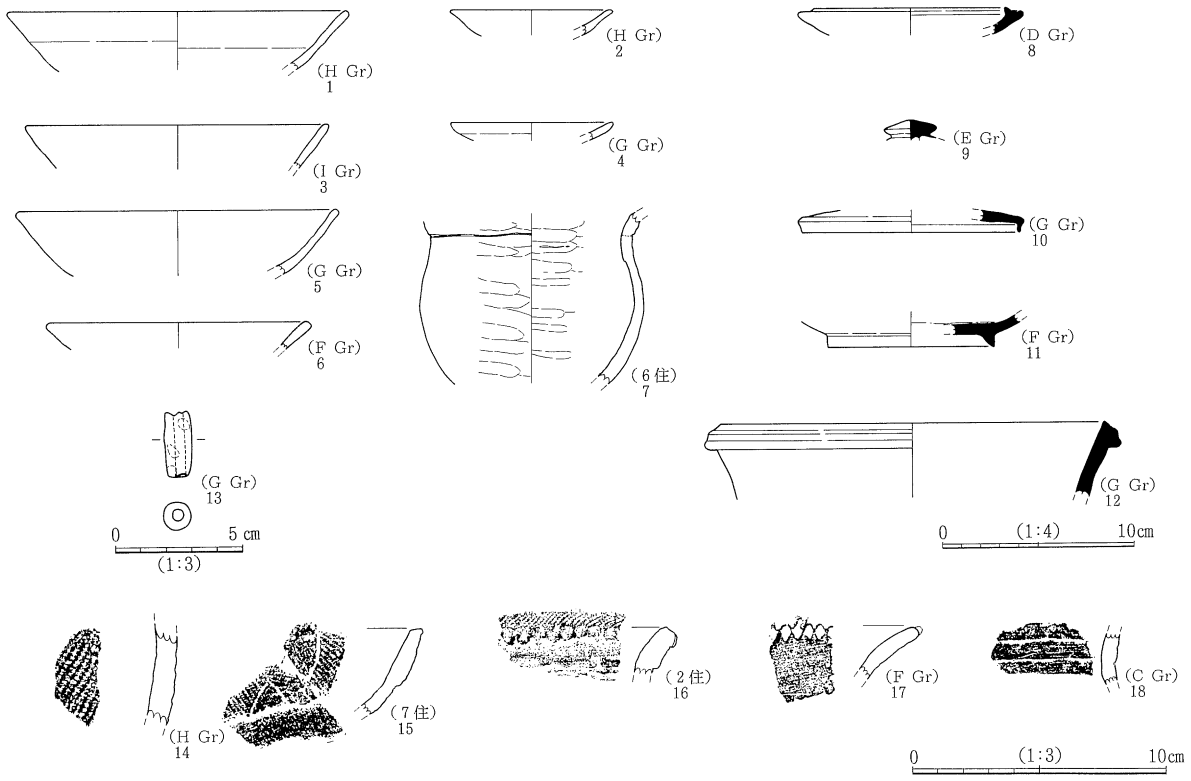
第13図　調査範囲と遺構配置図

確認面から床面までの掘り込みは約20㎝である。遺物は覆土中より小型甕胴部７が出土している。遺構・遺物の状況等から古墳時代前期に比定されると考えられる。

Ｉグリッド　７号住居跡が検出されている。遺物は覆土中から弥生時代後期浅鉢口縁部15が出土している。また、本グリッドの北東隅において８号住居跡が検出されている。

その他の遺物　その他の遺物としては、１・３・５・６がロクロ土師器杯であり、２・４はロクロ土師器小皿である。いずれも底部は残存していない。８～10・12・19・20は須恵器、11・21・22は灰釉陶器である。13は管状土錘と考えられ、現存長2.6㎝、最大径1.1㎝、中心穴径0.4㎝、重量は2.8ｇであるが両端部を欠失する。14は縄文土器、17・18は、弥生時代後期土器片である。他に緑釉陶器片23、中世陶器２点（24・25）、近世陶器２点（26・27）が出土している。

小　結　今回、郡本遺跡（第２次）と関連する弥生時代後期～奈良・平安時代の遺構が検出された。



第14図　出土遺物実測図

第５章　中高根南名山遺跡

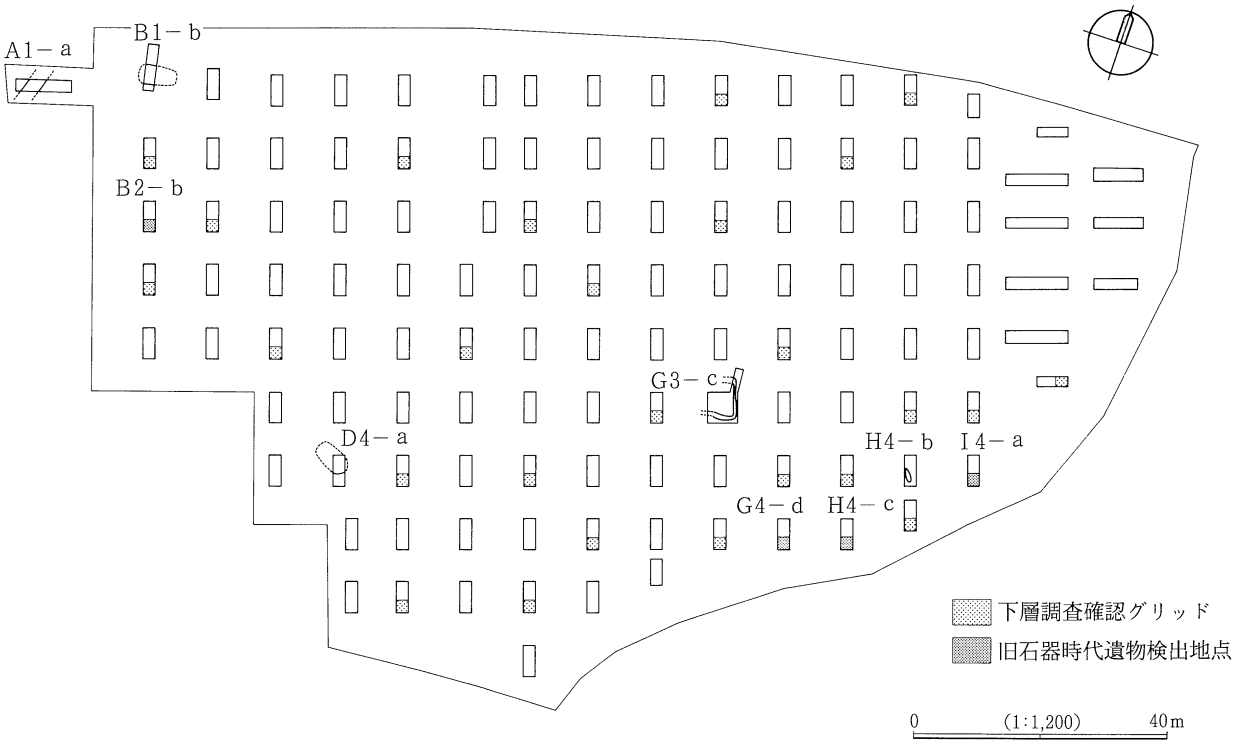
調査方法（第15・16図）

２×５ｍを中心としたグリッドを123カ所、調査区全体に任意に設定し、遺構確認面まで掘り下げたうえで遺構の有無と性格をとらえた。また上層の調査後にプレの下層調査を実施することになったため、上層において遺構が存在しないグリッドについて主に２×２ｍのグリッドを設定し、クラムシェル（重機）を使用して武蔵野ローム層第Ⅰ層上面に達する約２ｍの深さまで、20㎝ごとに掘り下げて旧石器時代の遺物の有無を確認した。

遺構（第16図）**と遺物**

確認された遺構は、上層では竪穴住居跡２軒、方形周溝状遺構１基、炉穴１基、道路状遺構１条であり、下層においてはⅢ層（ソフトローム）中において黒曜石集中地点１カ所、Ⅲ～Ⅳ層（ハードローム層）上層において、ナイフ形石器等検出グリッド３地点である。竪穴住居跡は、Ｂ１－ｂグリッド内の南側において確認された。確認面から床までの掘り込みは、約20㎝である。遺物は、縄文時代早期（鵜ガ島台式）の深鉢土器破片が12点（１～12）検出された。他の時期の遺物の混入が見られなかったことから、縄文時代早期の竪穴住居跡と比定される。またＤ４－ａグリッドにおいても、グリッド内北側に竪穴住居跡が確認された。本グリッド内の竪穴住居跡は、攪乱の影響で遺存状態がきわめて悪い。壁高はほとんど確認されず床はすでに露出し、床面が所々に痕跡程度に確認されるに過ぎない。遺物は、床面から約20㎝程上がった所に縄文時代前期（諸磯ｂ式）の深鉢土器片13が一点確認されているのみである。方形周溝状遺構は、Ｇ３－ｃグリッドにおいて確認された。確認面は耕作による攪乱が著しく、遺構確認さえ困難な状況であった。確認面における周溝幅は、30～50㎝前後であり、深さは５㎝未満で遺構の底面付近が、かろうじて残っているという状況であった。そして、西側は遺構

第15図　中高根南名山遺跡調査地点と周辺地形図



第16図　調査範囲と遺構配置図

が消失してしまっていた。遺物は、長頸壺の頸部24が一点のみ検出されている。炉穴は、Ｈ４－ｂグリッドにおいて検出されている。長軸2.31ｍ、短軸0.83ｍを測り、長軸方向は、北西を向いている。確認面からの掘り込みは10㎝前後と浅く、また確認面はトレンチャーによる攪乱を受けており、遺存状態は良くない。遺構中央北寄り底面付近において、焼土が堆積していた。遺物等は検出されなかったが、グリッド周囲から縄文時代早期に比定される土器片等が検出されており、本遺構の帰属時期も縄文時代早期と考えられる。道路状遺構は、Ａ１－ａグリッドにおいて確認されている。調査区西北端部にあり、グリッド西側を北東－南西方向に横断している。溝状に掘り込まれており幅2.9ｍ、深さ0.4ｍを測る。溝の下底面中央が道状に硬化していた。硬質面は、幅が約50㎝、厚さが約10㎝を測る。遺物は検出されなかった。

次に下層調査について述べる。下層について検出された遺構・遺物は、Ｂ２－ｂグリッドにおいて黒曜石集中地点が検出された。Ⅲａ層（ソフトローム漸移層）からⅢｂ層（ソフトローム層）にかけて出土しており、堆積土約20～30㎝の厚さにわたって、黒曜石及びチャートのチップ・フレーク（25～27・31・32）が検出された。またＧ４－ｄグリッドからは黒曜石チップ29が検出された。Ｈ４－ｃグリッドからは、ナイフ形石器33が検出され、Ｉ４－ａグリッドでは、石刃34が検出された。出土層位は、いずれもⅢ層（ソフトローム層）～Ⅳ層（ハードローム層）上層内である。この３グリッドは、本遺跡が立地する台地の南東側縁辺に位置しており、出土層位はいずれもほぼ同層と考えられることから、このグリッド一帯がⅢ層～Ⅳ層上層相当時期に一つの文化層として展開していた可能性が高い。

その他の遺物　一括遺物は縄文土器(14～23)、黒曜石28、磨製石斧・磨石(35～45) 等を検出した。

小　結　今回、旧石器時代の石器集中地点や、縄文早期の竪穴住居跡等が検出された。特に旧石器時代遺物の検出が面的な広がりを持って確認できたことは、調査の大きな成果であると考えられる。

第６章　市原条里制遺跡（八幡砂田地区）

調査方法（第17・18図）

東京湾東岸の後背低湿地上（標高約５ｍ）に立地するため、廃水対策と盛土などを考慮して２カ所のトレンチを設定した。トレンチは調査範囲の形や条里の推定方向などから北より東へ45°振った方位に設定した。東側を１トレンチ、西側を２トレンチとした。掘り下げは特に古代の条里制遺構の検出を主眼においたため既存の成果（大谷弘幸氏ご教示）によりⅡ３層下位面まで下げてプランの確認を行った。土層はトレンチの周囲のサブトレンチ（廃水も兼ねる）の層を記録した。

遺構（第18・19図）

土層は、上層の耕作土から最下層の自然層の明灰色粘土層まで８層を確認した。最下層上面までの平均の深さは約1.3ｍ～1.4ｍである。各層序は、Ⅰ層－水田耕作土、黒灰色、貝殻片を含む。Ⅱ1層－青灰色粘土層、ローム粒（多い）と酸化鉄（少量）を含む。富士宝永火山灰を下位に含む。Ⅱ2層－青灰色粘土層、ローム粒と酸化鉄（多い）を含む。Ⅱ3層－青灰色粘土層。Ⅲ1層－茶褐色泥炭層、Ⅱ3層とⅢ2層の漸移層。Ⅲ2層－茶褐色泥炭層。Ⅲ3層－黒色泥炭層。Ⅳ層－明灰色粘質土層である。各層の時期は、Ⅱ1層が近世、Ⅱ2層が中世、Ⅱ3層が古代、Ⅲ2層～Ⅲ3層が縄文時代後期と考えられている。（なお、土層名は本書では仮名称とし今後統一したい。）

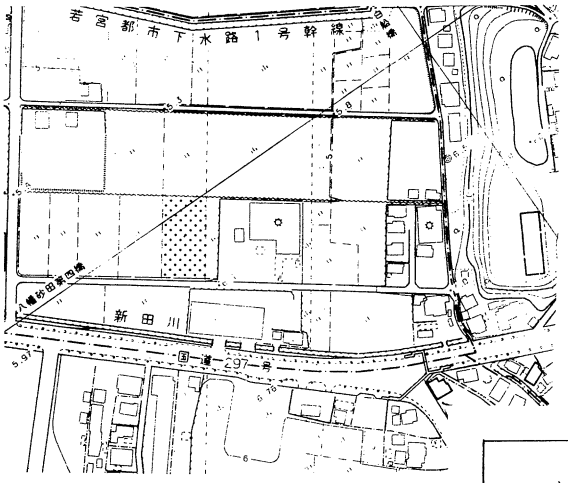
Ⅱ３層下位の面より、水田の擬似畦畔を４カ所検出した。幅は25～50㎝、主方向はＮ－40°－Ｅを示す。１トレンチの南側では交差している部分もみられ、また２トレンチの中央部付近には、プランでは確認できなかったが、自然木の株が存在し畦畔部分に残っていた可能性もうかがえる。１トレンチの北側でのプランは確認できなかった。

遺物（第20図）

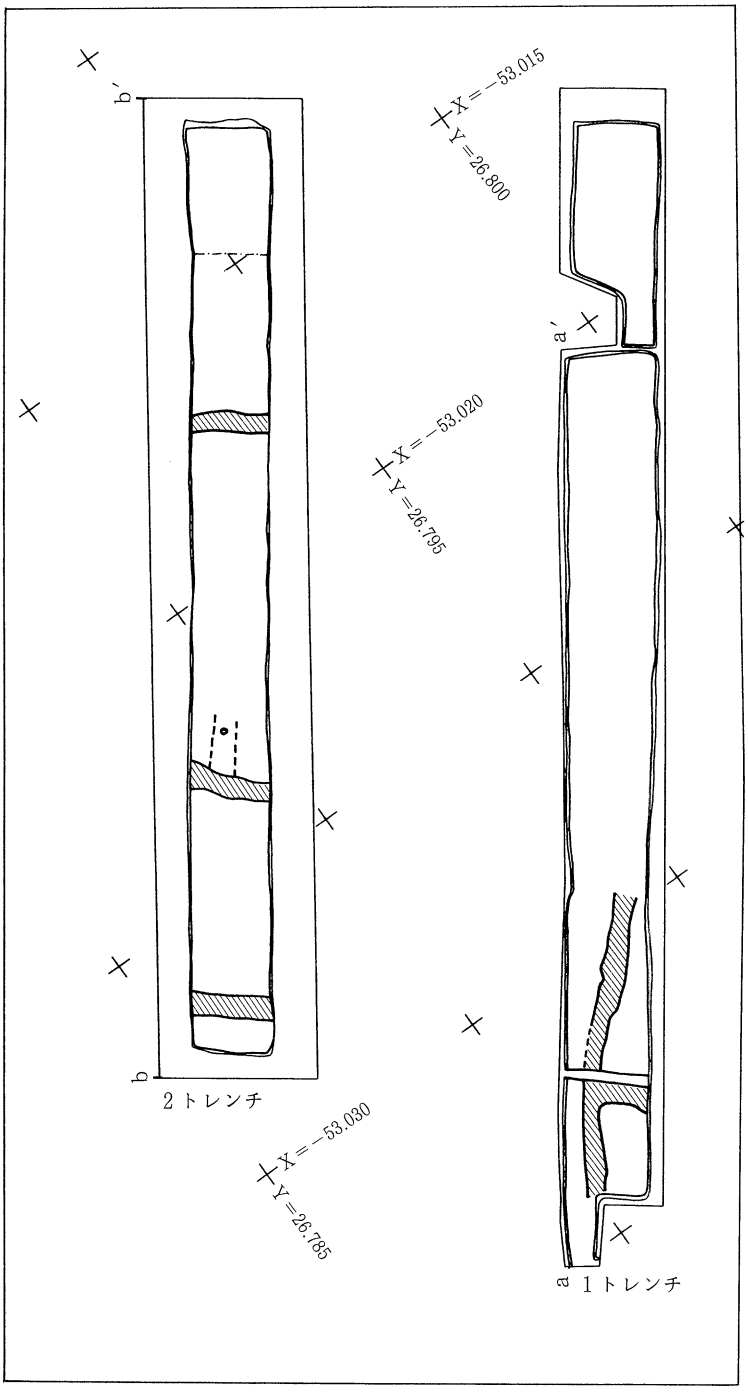
１～10は、Ⅱ３層で出土した。すべて小片で磨耗している。１～５は須恵器である。１と２は、蓋杯で、１は焼成良好、両面暗灰色、外面の一部に自然釉がかかる。推定口径10.7㎝。２は、焼成普通、両面暗灰色で推定口径は18.3㎝。３と４は小型の甕の胴部片とみられ、各々外面に平行線のタタキ目が認められる。３は焼成普通で外面黒灰色、内面灰色、４は焼成普通、両面淡灰色、５は壺の胴部片とみられ、外面は自然釉がかかり暗灰緑色で内面は暗灰色、焼成は良好。６～９は女瓦片で、６～９の凹面には布目、凸面はヘラケズリとみられるが、７は格子状叩き痕が認められる。６は焼成が少し不良、凹面黒灰色、凸面灰褐色、７は焼成やや不良、厚さ2.2㎝、８は焼成少し不良、凹面灰褐色、厚さ1.9㎝、９は面取りの側面と端部が残り、焼成良好、凹面は黒灰色、凸面は暗灰色、厚さ2.1㎝、10は男瓦片とみられ、凹面に布目痕、凸面はヘラケズリである。凹面は暗灰色で凸面は灰色、焼成は少し不良、厚さ2.1㎝。11はⅡ2層上部から出土した宋銭である。銘部分は磨耗しているが、他の部分は保存良好である。「皇宋通寶」で初鋳年は1,038年、3.2gを量る。

小　結

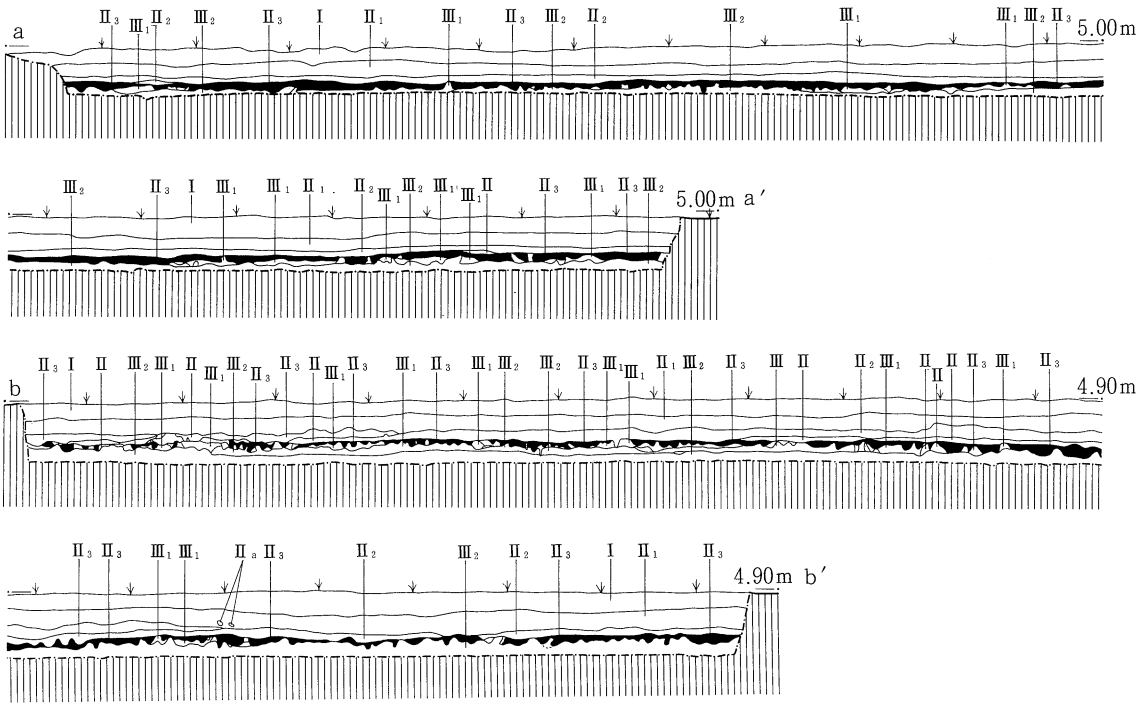
今回の調査は、廃水や盛土などによる制約で小範囲の調査であったが、古代と思われる水田畦畔跡を一部検出した。規模からみて、条里の坪内畦畔と考えられる。出土遺物は直接遺構に伴わないが、既存の成果による層位の時代に適合する遺物が特にⅡ3層から検出されたことが注目できる。なお、Ⅲ1層以下からの遺物は自然木以外出土していない。



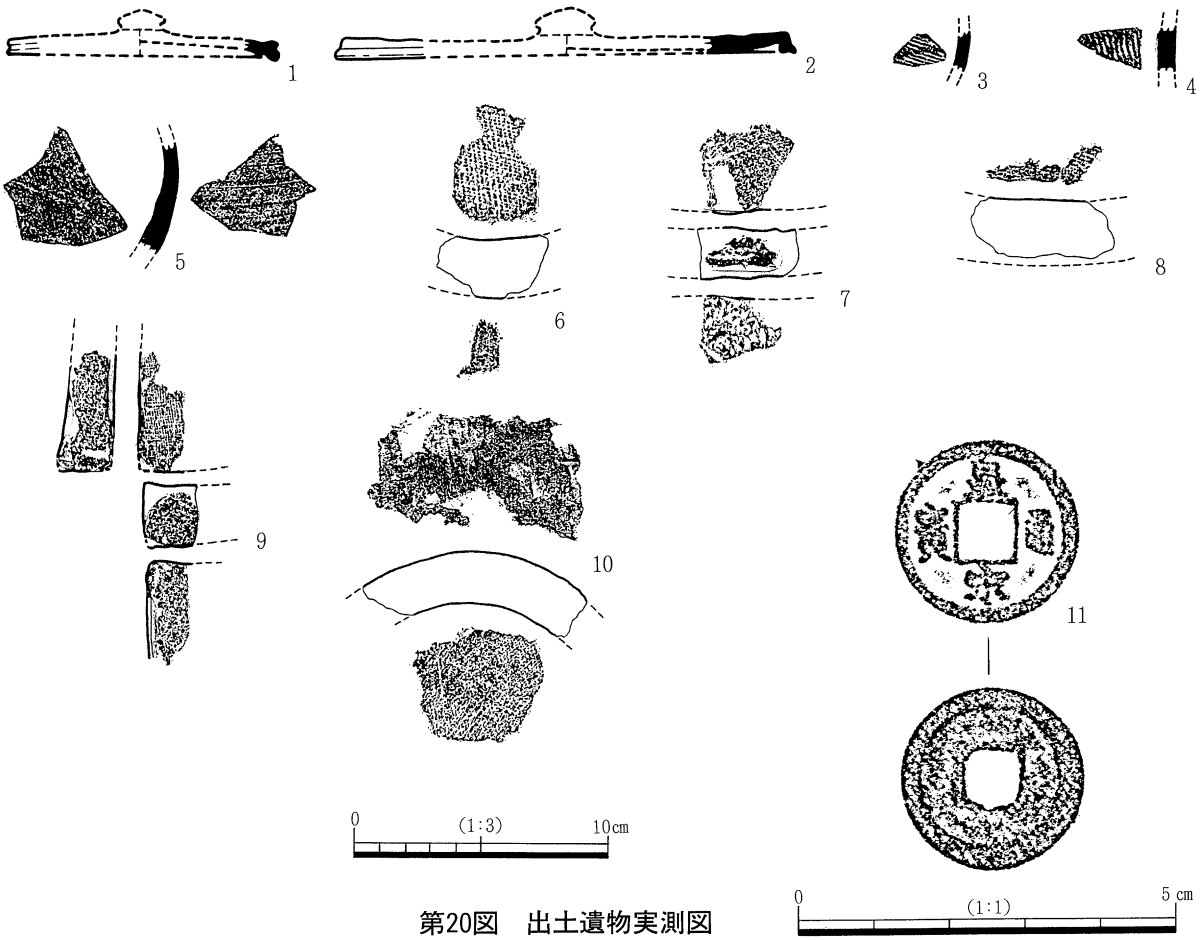
第17図　市原条里制遺跡
（八幡砂田地区）
調査地点と周辺地形図



第18図　調査範囲と遺構配置図



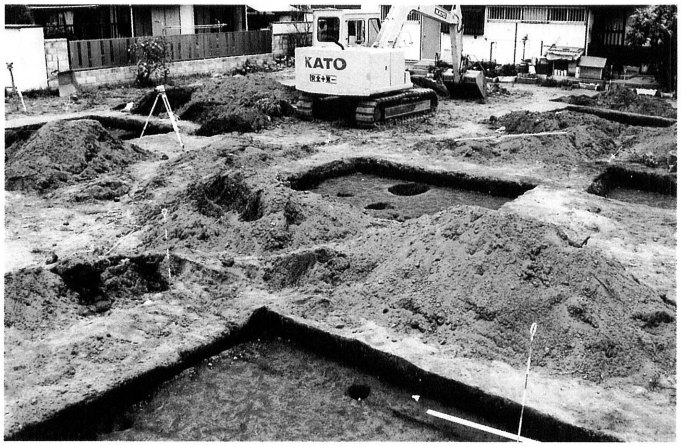
第19図　１トレンチ，２トレンチ土層断面図
（※古代の包含層を黒く塗りつぶしている）



第20図　出土遺物実測図

図版１

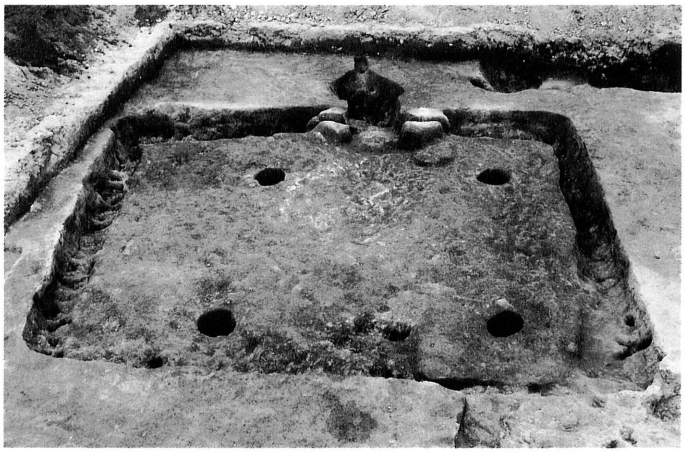
調査前近景（南東から）



グリッド配置状況（南西から）

１グリッド遺構確認状況（南から）

本調査状況（南東から）



１号住居跡（南から）

２号住居跡（南東から）

１・２号溝状遺構（東から）

１号溝状遺構（西から）

調査前近景（北から）

トレンチ配置状況（南東から）

遺構検出状況（北西から）

2号土坑遺物出土状況（北東から）

郡本遺跡（第４次）

調査前近景（北から）

グリッド配置状況（北東から）

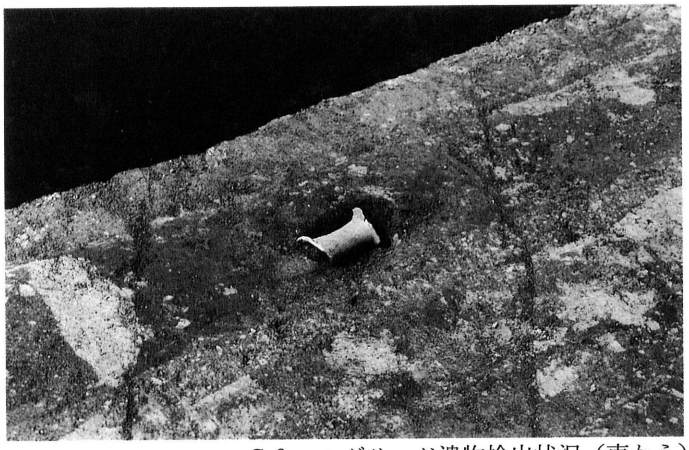
確認調査状況（南から）

Hグリッド遺物検出状況（南東から）

図版３

調査前近景（西から）

グリッド配置状況（北西から）



Ｇ３－ｃグリッド遺物検出状況（東から）

Ｂ２－ｂグリッド遺物検出状況（北から）

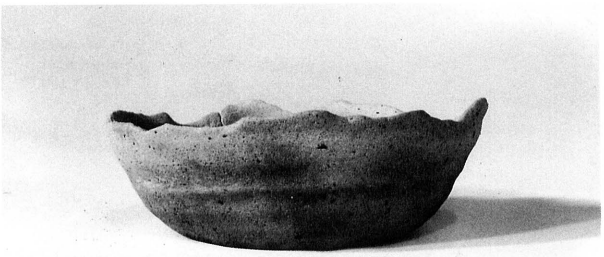
市原条里制遺跡（八幡砂田地区）

調査前近景（西から）

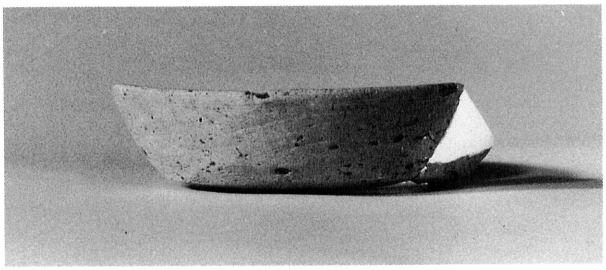
トレンチ配置状況

２トレンチ遺構検出状況（南西から）

１トレンチ遺構検出状況（南西から）

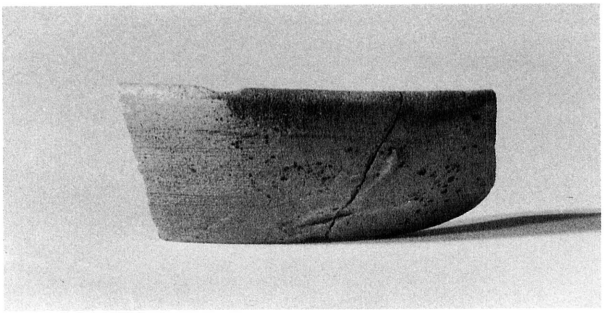


2

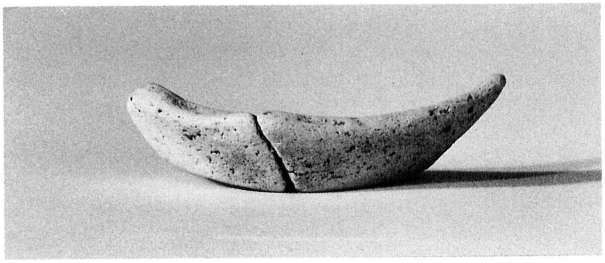


4

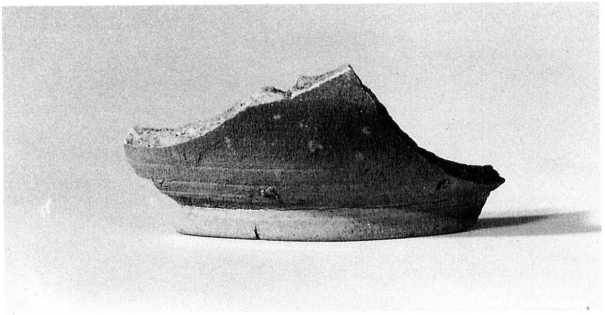
7



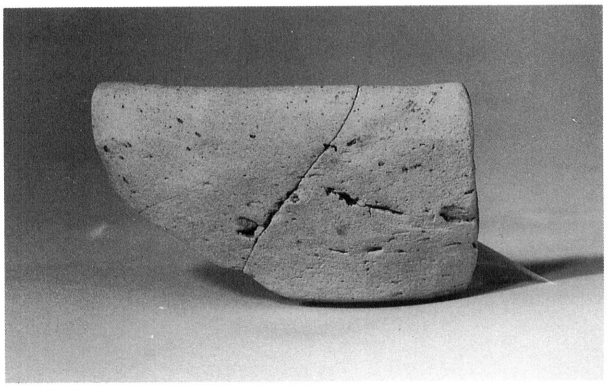
56



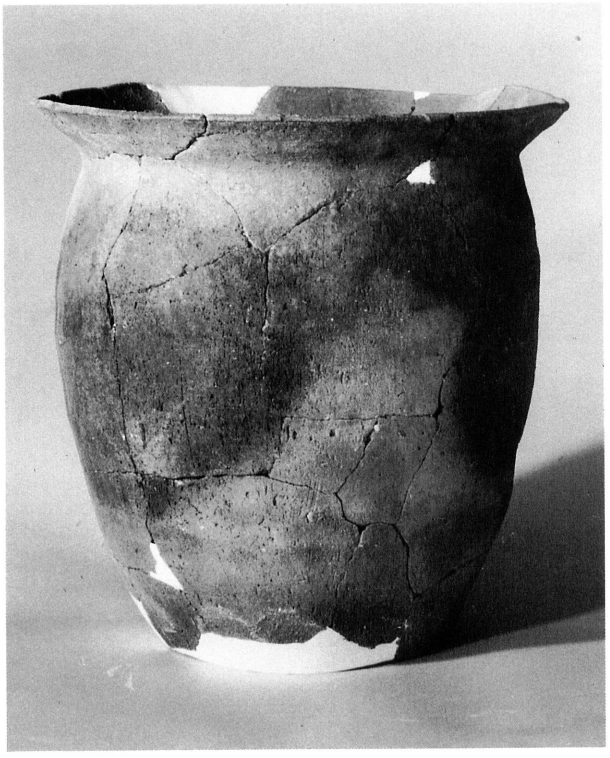
68



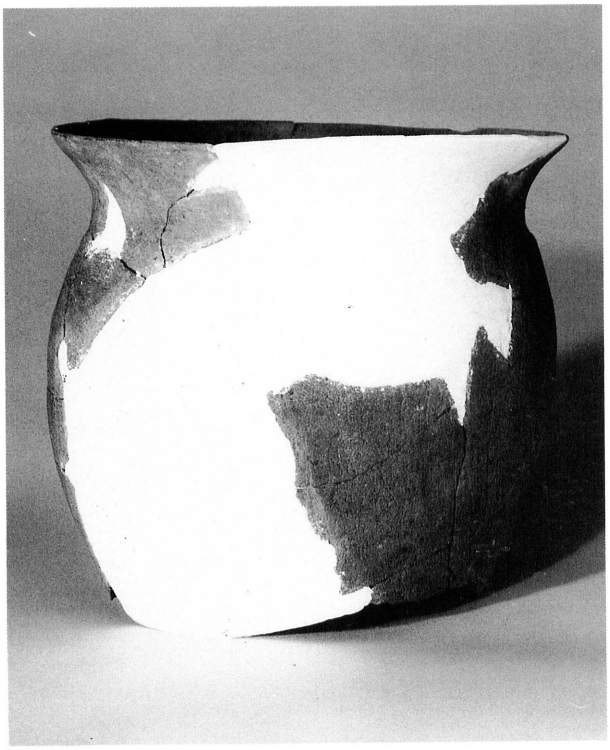
23



3

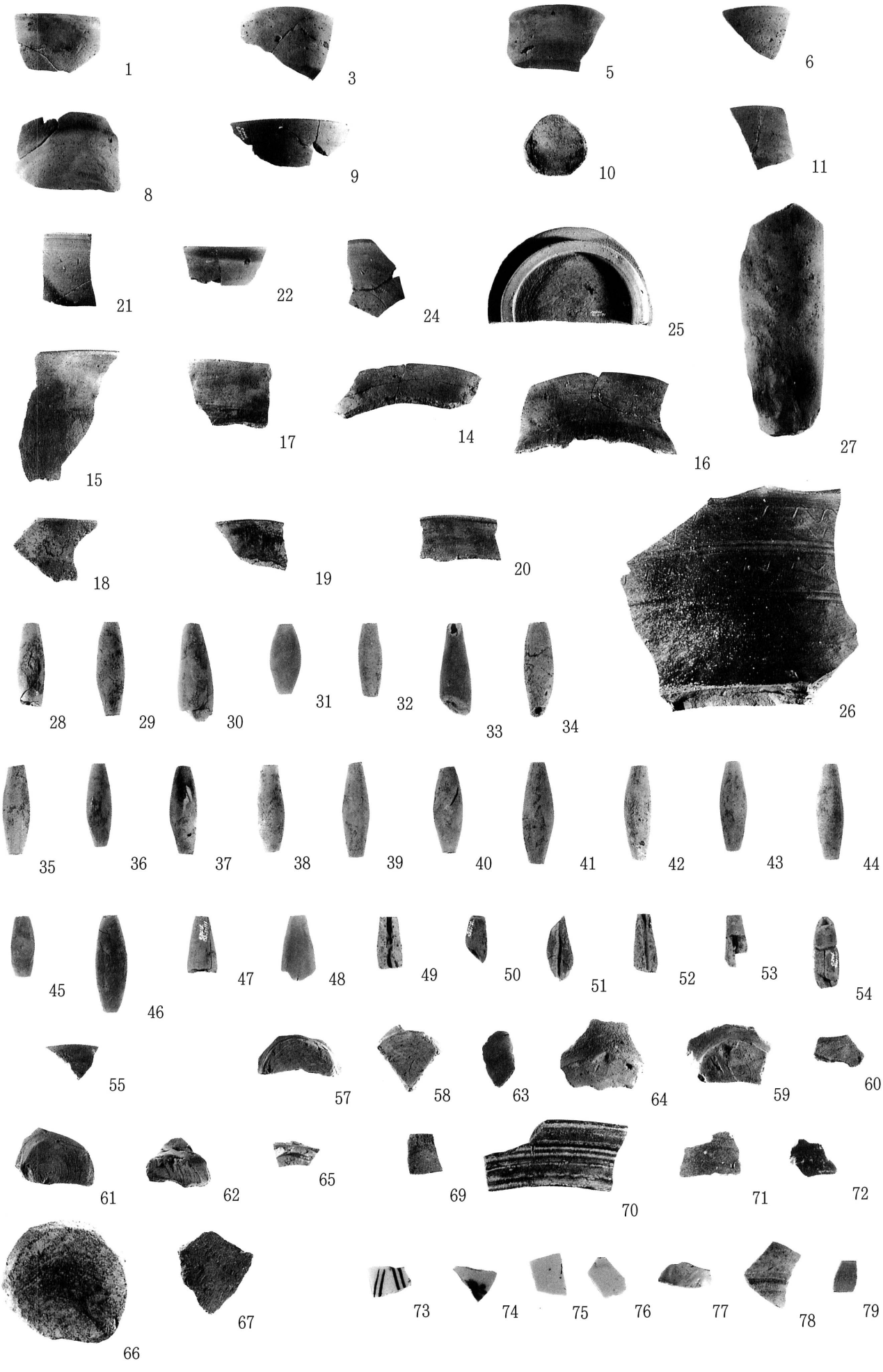


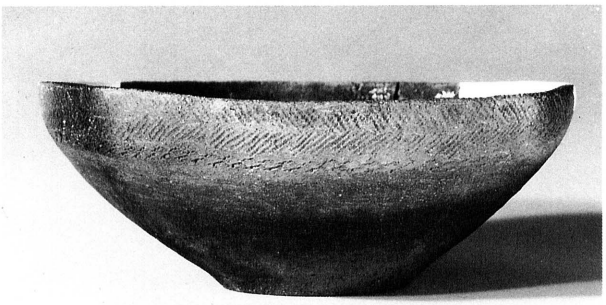
12



13

図版5

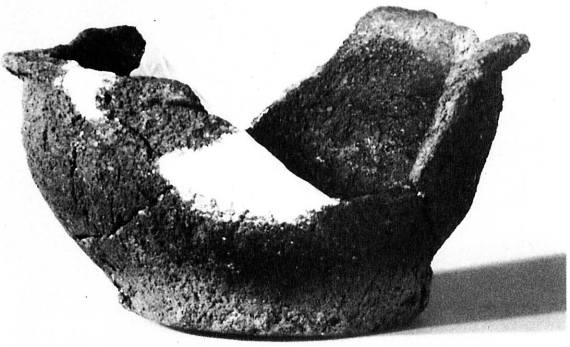

1
3
5
6
8
9
10
11
21
22
24
25
27
15
17
14
16
18
19
20
26
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
57
58
63
64
59
60
61
62
65
69
70
71
72
66
67
73
74
75
76
77
78
79



6

5

1

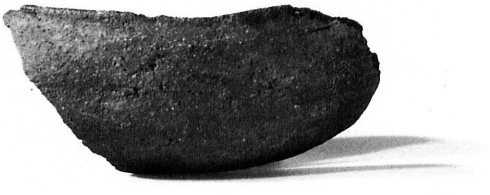


19

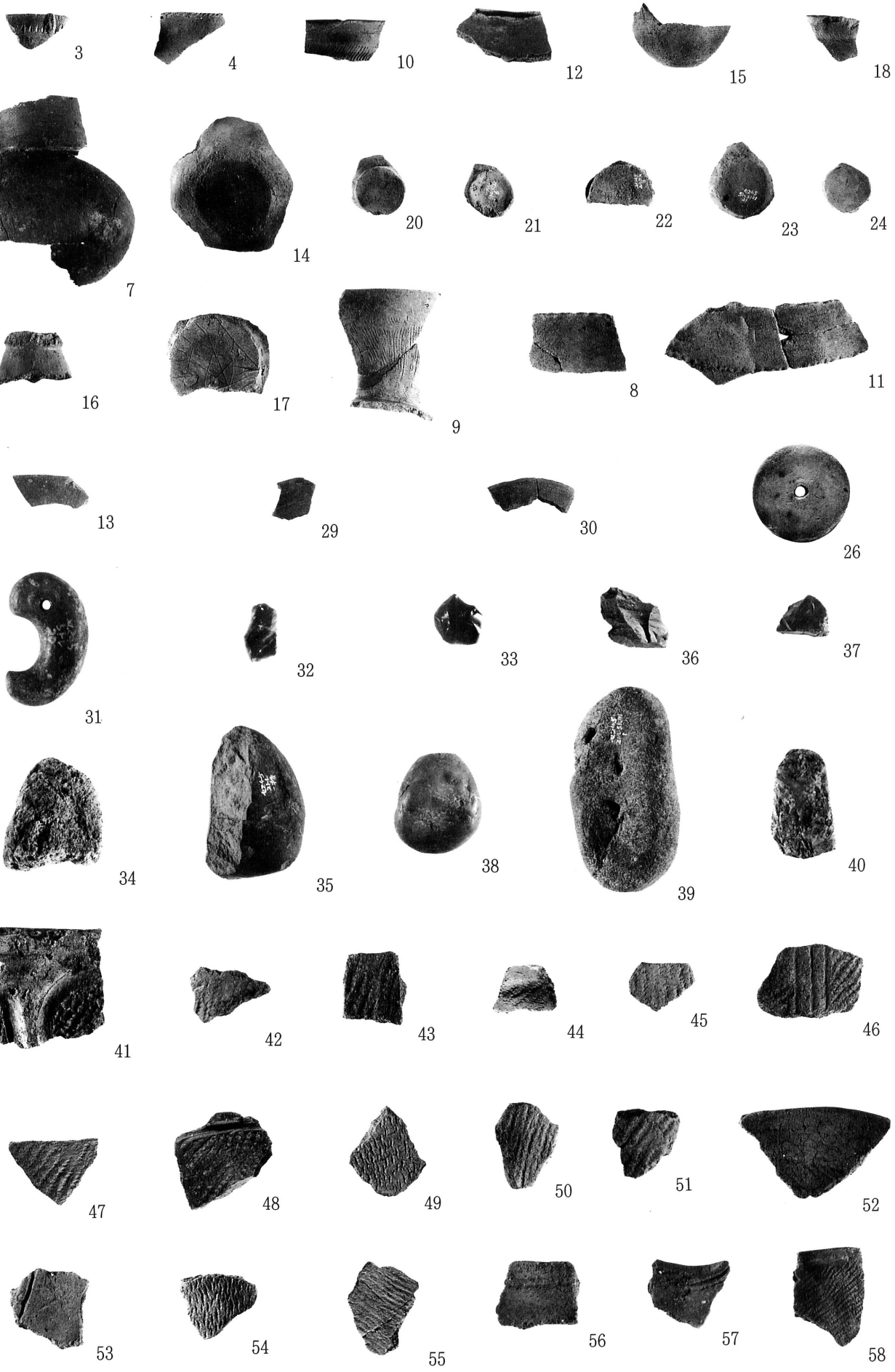
2

27

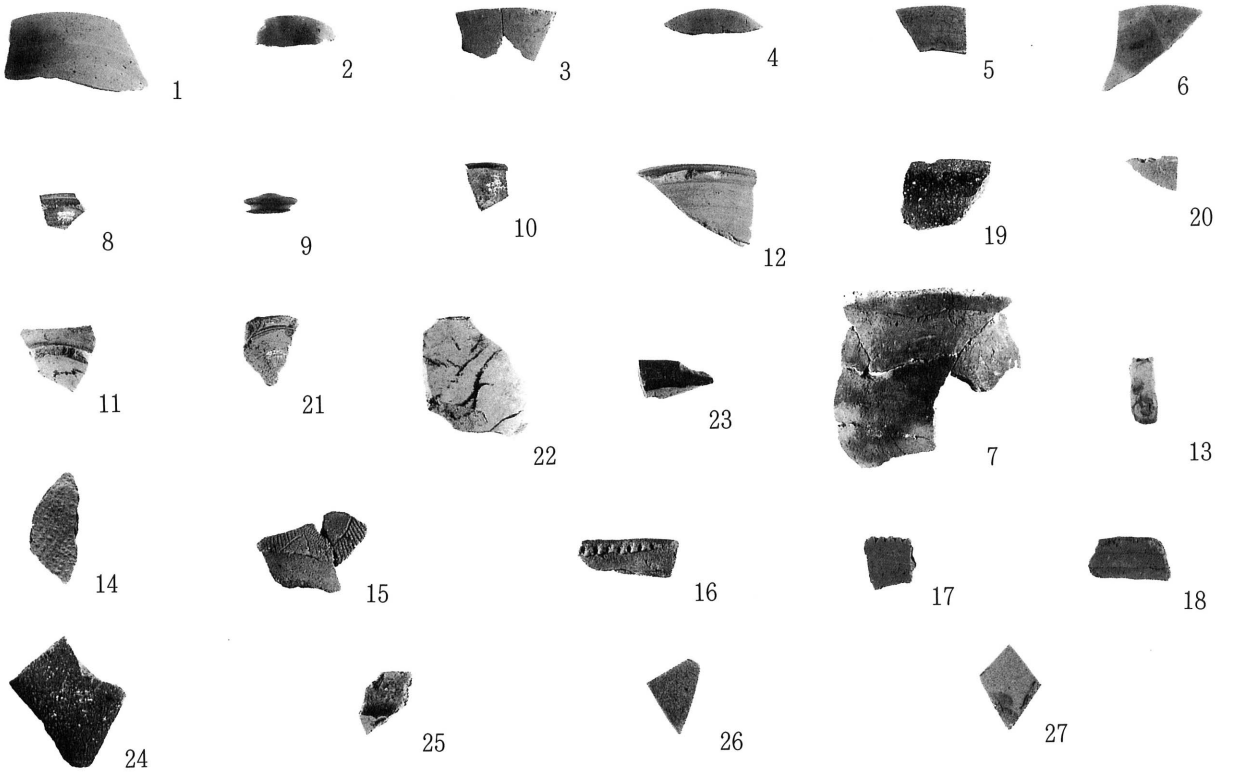
25



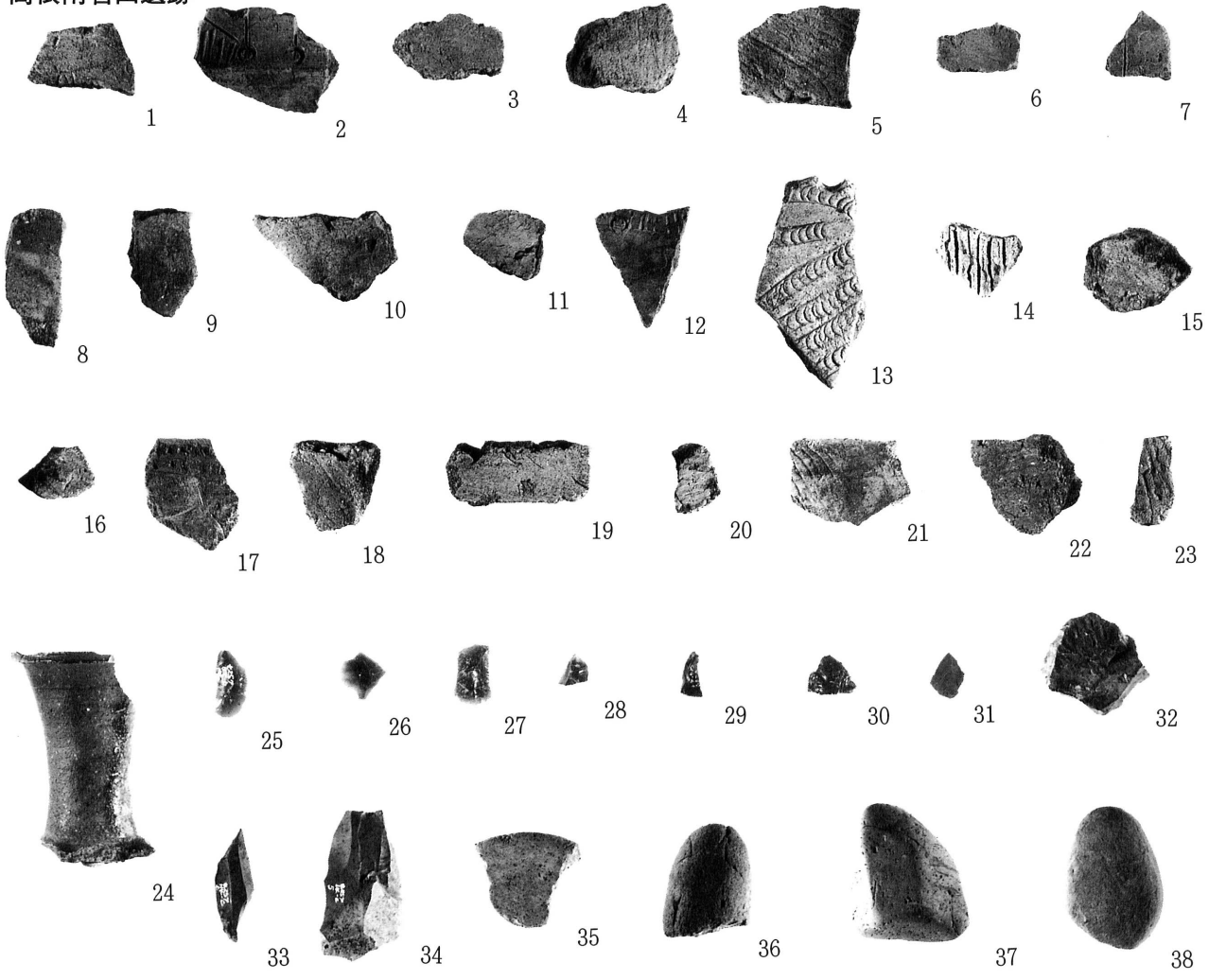
28

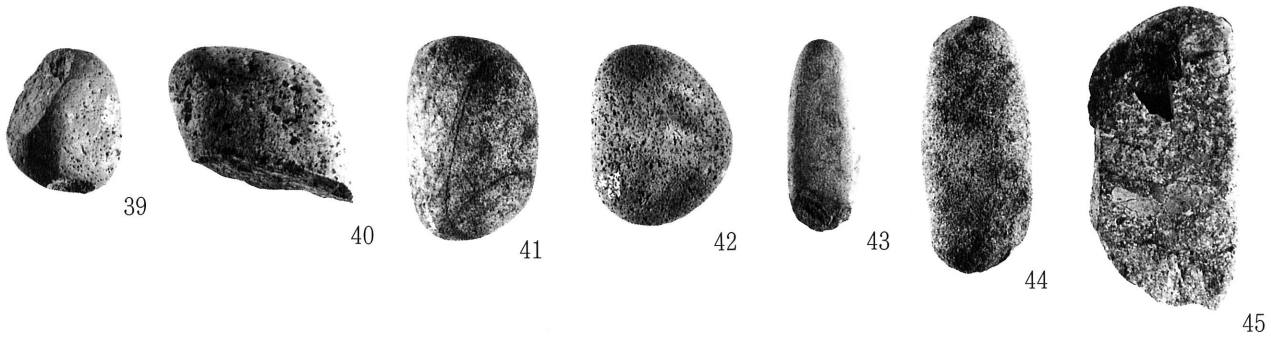

3
4
10
12
15
18
7
14
20
21
22
23
24
16
17
9
8
11
13
29
30
26
31
32
33
36
37
34
35
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58

郡本遺跡（第４次）

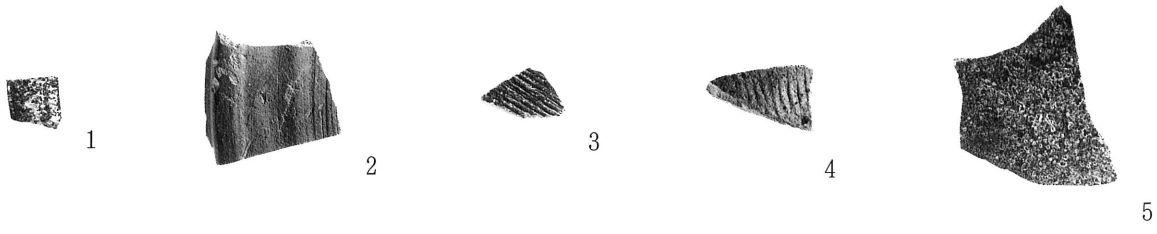


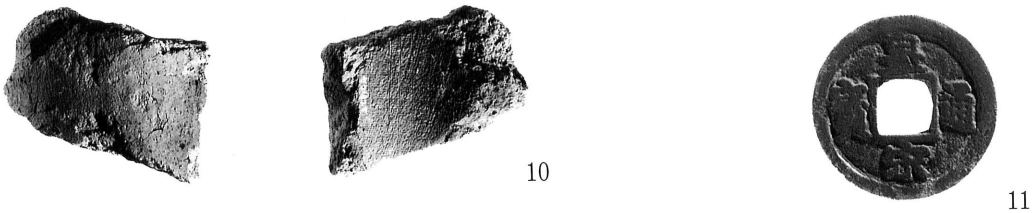
中高根南名山遺跡





市原条里制遺跡（八幡砂田地区）





報告書抄録

ふりがな	へいせいくねんどいちはらしないいせきはっくつちょうさほうこく
書名	平成9年度市原市内遺跡発掘調査報告
副書名	郡本遺跡(第3次)・草刈谷畑遺跡・郡本遺跡(第4次)・中高根南名山遺跡・市原条里制遺跡(八幡砂田地区)
巻次	
シリーズ名	市原市内遺跡発掘調査報告
シリーズ番	第11冊目
編著者名	田中清美・小川浩一
編集機関	財団法人市原市文化財センター
所在地	〒290-0011　千葉県市原市能満1,489番地　　TEL　0436－41－9000
発行年月日	西暦　　1998年3月27日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
こおりもといせき 郡本遺跡(第3次)	ちばけんいちはらしこおりもと 千葉県市原市郡本 いっちょうめ 1丁目131	12219　セ244	35度 30分 33秒	140度 07分 26秒	19970414～ 19970423	60㎡ (確認調査) 245㎡ (本調査)	専用住宅の建築に伴う埋蔵文化財調査
くさかりやばたけいせき 草刈谷畑遺跡	ちばけんいちはらしくさかり 千葉県市原市草刈 1,273	12219　セ245	35度 31分 39秒	140度 10分 29秒	19970424～ 19970509	278㎡	駐車場造成に伴う埋蔵文化財調査
こおりもといせき 郡本遺跡(第4次)	ちばけんいちはらしこおりもと 千葉県市原市郡本 さんちょうめ 3丁目201-1の一部	12219　セ246	35度 30分 34秒	140度 07分 33秒	19970512～ 19970519	74㎡	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査
なかたかねななやまいせき 中高根南名山遺跡	ちばけんいちはらしなかたかね 千葉県市原市中高根 あざななやま 字南名山1,341-1､-2	12219　セ257	35度 25分 42秒	140度 05分 51秒	19970916～ 19971020	1,300㎡ (上層) 130㎡ (下層)	老人保健施設建設に伴う埋蔵文化財調査
いちはらじょうりせいいせき 市原条里制遺跡 やわたすなだちく (八幡砂田地区)	ちばけんいちはらしやわた 千葉県市原市八幡 あざすなだ 字砂田261-2,262-2	12219　セ218	35度 31分 18秒	140度 07分 43秒	19960111～ 19960205	429㎡	ガソリンスタンド建設に伴う埋蔵文化財調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡本遺跡(第3次)	集落跡	古墳後期 奈良・平安時代	古墳後期竪穴住居跡1，奈良時代竪穴住跡1，平安時代溝2	縄文土器，土師器，須恵器，灰釉陶器，管状土錘，支脚，中近世陶磁器	市原郡衙推定地の隣接地であることから関連遺構の可能性もある。
草刈谷畑遺跡	集落跡 古墳	弥生後期 古墳前期 古墳中期	古墳中期円墳1,弥生後期～古墳前期竪穴住居跡14，古墳前期土坑2	縄文土器，弥生土器，土師器，勾玉，磨製石斧，磨石，土製紡錘車	草刈遺跡群における弥生時代～古墳時代の遺構の広がりを把握した。
郡本遺跡(第4次)	集落跡	弥生時代 古墳時代 奈良・平安	弥生後期～古墳前期竪穴住居跡7，奈良・平安住居跡1，掘立柱建物跡3	縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，灰釉・緑釉陶器，中近世陶器	郡本遺跡（第2次）に隣接し、同時期の遺構の広範囲な展開を確認。
中高根南名山遺跡	散布地	旧石器時代 縄文時代 奈良・平安	旧石器時代遺物検出地点4，縄文炉穴1，縄文竪穴住居跡2，平安方形周溝状遺構1	黒曜石剥片，ナイフ型石器，石刃，焼礫，石核，縄文土器，灰釉陶器	Ⅲ層～Ⅳ層上層において旧石器時代遺物を数カ所にわたり検出した。
市原条里制遺跡 (八幡砂田地区)	水田	縄文時代 弥生時代 古代～近世	奈良・平安時代（畦畔）	土師器，須恵器，布目瓦，宋銭	東側に隣接する遺跡（東関道館山線内）と同時期の水田（畦畔）の展開を把握した。

平成９年度市原市内遺跡発掘調査報告
平成 10 年 3 月 23 日　印刷
平成 10 年 3 月 27 日　発行
編　集　財団法人　市原市文化財センター
市原市能満 1,489 番地
発　行　千葉県市原市教育委員会
市原市惣社1,040－1 番地
印　刷　三陽工業株式会社
市原市五井5,510－1番地